
Sea side Art clubber

伊藤 美優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sea side Art clubber

【Nコード】

N4388W

【作者名】

伊藤 美優

【あらすじ】

Sea side Art Clubの続編が満を持して登場！しおさい高校の美術部に入部した斉藤サイトは一学期の修了式を迎え、初の全道大会に挑む！個性豊かな部員達が繰り広げる新感覚文科系ストーリー！

毎日更新を目指して頑張ります。作者ブログも絶好調掲載中！

R e : スタート! (前書き)

まさかの第2部スタートです。よろしくお願いします^^

Re:スタート!

季節は7月の後半、セミがおおきな声で鳴き始め潮風が夏の薫りを
つれてくる。今日はしおさい高校一学期修了式だ。

斉藤サイトは他の生徒達と一緒に体育館に集められ、校長先生の長
々とした話を立ったまま聞かされていた。

サイトは隣の列に並んだ1年2組の松野良風まつのよしかぜに話しかけた。

「なあついに明日だな。」

「うん。そうだね。明日からだね。」

サイトの前に並んでいた大和健もうんうんと頷いた。

「明日から合宿だな。そしてその後は全道大会。どんな感じになる
か楽しみだな。」

松野の後ろに並んでいた高城条一郎たかしろじょういちろうが言った。その様子を見ていた
3組の高木秀院たかぎしゅういんが冷やかした。

「おい、お前らほんと仲良いよな。夏休みなんだから外に出てあそ
べつつーの。男連中だけでシコシコやってたってつまんねーだろ。」

高木はサイトが自己紹介の時に盲腸の件を馬鹿にしたチャラチャラ
グループのひとりだ。大和はこの生徒が嫌いらしく、

「うぜえ・・・手淫のくせに・・・」と近くのサイトに聞こえるか

どうかの小さな声で文句を言った。 . . . 全国の秀院さんにあやま
れっての。

「この前の発表会では負けちゃったけど、今度は負けないよサイト。
毎日部活にでて絵を描いてるからね。」

松野が鼻からふう、と息を噴き出しながら今回の大会に向けての意
気込みを語った。松野は発表会の後少し落ち込んでいたが

最近では気持ちを入れ替え新しい絵の描き方にトライしているようだ。
サイトも言い返した。

「こないだの発表会はデモンストレーションだからな。全道大会で
入賞したヤツが一番上手いんだよ。とりあえず今回も優勝してやつ
かな。」

サイトの大口に美術部員が「おおー言うねえー」と仰け反り返った。
サイトは本当は自信がまったく無かった。発表会で優勝できたのは
まったくのマグレだったし、発表会が終わってから美術部には「練
習は自由参加」というような空気が流れ始め、発表会で苦汁をなめた

松野以外は放課後の部活にあまり参加しなくなっていた。やはり明
確な目標がないと人間という生き物は頑張れないのだと、廊下で

会った時条一郎が言っていた。いつの間にか松野の隣にやってきた
1組の美術部員の神崎智紀かんざきとものりが言った。

「まあ俺達の目標はとりあえず道南大会で入賞して全道大会に行く
ことじゃね？まあサイトと自称天才の松野くんは

もつと上にいくんでしょうけどね」

普段は真面目な神崎がサイトと松野を冷やかしたので美術部員以外の生徒にも笑いが起きた。見かねて3組の担当の寺田先生が

「えー、そこ、静かにしないか。」と注意した。神崎はそそくさと自分の1組の列に戻った。ステージの上で話していた校長先生が話を締めくくるようにこう言った。

「それでは皆さん、夏休みの間、健康で真つ当な高校生らしい毎日を送ってください。私の話は以上とさせていただきます。」

校長先生が頭をぺこりと下げると生徒達からまばらに拍手が起こった。つづいて放送部の生徒のアナウンスが響いた。

「校長先生、ありがとうございます。これからしおさい高校校歌を歌います。」

吹奏楽部と思われる生徒がピアノで校歌の伴奏を演奏し始めた。サイトは胸のポケットから出した生徒手帳に書かれている歌詞を見ながら

他の生徒と同じように校歌を歌い始めた。

朝焼け差し込む中庭と 眼下に広がる白い浜

友と並びて 歌謳^{うた}う

文化の営み たおやかに

あふるる希望は わが母校

ピアノのアウトロが終わると「これで修了式を終わります。1年1組の生徒から教室へ戻ってください。」とアナウンスが流れたので

神崎が「じゃ、後で部室でな」と言いながら体育館の入り口から出て行った。合宿か。なんか充実した高校生活になってきたな。

サイトは自分が入学してきた時と今の自分を比べて明らかに気持ち
が明るくなっただきているのがわかった。

玄関先で詠進先輩えいしんの絵に出会えてよかった。サイトは美術との出会いに感謝しながら廊下を渡った。

Re:スタート！（後書き）

しおさい高校の校歌は3番まであります。合宿もあるようなのでご期待ください^^

HR

クラスに戻ると1年3組の生徒達は各々に夏休みの計画を友達と話し始めた。前の席の大和と馬鹿話をしているサイトにクラスメイトの山里マキちゃんが話しかけてきた。

「サイト君。あのね、明日近くで花火大会があるんだけど一緒に行かない？もちろん他に何人も来るけどみんなにサイト君を紹介しようかなあと思つて。．．．どうかな？」

マキちゃんはサイトが自己紹介した時に口を手をあてて笑っていた女の子だ。クラスで一番の人気物で、清楚で性格の良い生徒として先生達からの評価も高い。サイトはいきなりの誘いにどうしていいかわからなかったがこう答えた。

「あ、あしたなんだけど、俺達美術部、合宿があるんだよね。だから明日はちよつとなあ、」

サイトが頭を傾げていると大和も残念そうな顔をしていた。お前は誘われてないっちゅーに。クラスを歩き回っていた高木秀院が口を挟んだ。

「マキ、そいつらは鉄の絆で結ばれた仲だからあんまり無理に誘わないほうがいいぜ。そんなヤツラより俺達と一緒にいいこーぜ。」

秀院が親指を後ろの方に指すと、後ろに座っていたチャラチャラグループがうーい、と声を挙げた。マキちゃんは恥ずかしそうに

「残念だね。また誘ってもいい？」とサイトに聞いた。サイトは「あ、ああ。いいよ。」と動揺しながら答えた。いわゆる「社交辞令」と

いうやつだろうか。マキちゃんがチャラチャラグループの方に行く
と大和がちつ、と舌打ちをして、

「手淫のやつ・・・調子こきやがって・・・コクのはマスだけにし
とけよ・・・」と珍しく怒りを露わにした。大和は授業中に秀院に

「とやまけん」というあだ名をつけられてから秀院とチャラチャラ
グループを敵視するようになっていた。ぶつぶつと不満を言っている

大和をなだめていると教室のドアが開き担任の寺田先生が入ってきた。
日直の木田君がみんなに静かにするように言い、ホームルーム
が始まった。

「えー、みんな明日から夏休みが始まるわけだがしおさい高校のひ
とりとして自覚を持った行動を、」

「せんせー、今日はみんな予定があるんで短めにおねがいしまーす。
」

秀院が先生を冷やかすとクラスに笑いが起きた。これにはサイトも
一緒に笑った。寺田先生の長話のせいで何度部活に行くのが

遅くなったことか。寺田先生はごほん、と咳払いをすると

「そつだな。今日ぐらいいは先生も大人しくしてよう。宿題は配って
あるな？それじゃ解散！とりあえず先生に迷惑をかけるような事だ

けはやめてくれよな。」

先生が言うとはーい、と誰かが言い、クラスから勢い良く生徒達が
出て行った。サイトも大和と一緒に美術室へ向かった。今日は大島
先生と

ノマ部長から明日の合宿についての説明があるそうだ。高揚した気
分を抑えられない生徒が廊下で大声ではしゃいでいた。

合宿ミーティング

サイトと大和が美術部に入ると、1組の神崎が先に来て前の方の机に座っていた。神崎があれ？今日は早いね、とサイトに言う

美術部の去年の活動記録が載ったアルバムを見せてくれた。大和と一緒に覗きこむと「合宿のおもひで」とノマ部長の字で書かれた文の上にピースサインをする美術部員達が写った写真が載っていた。数えてみると11人の生徒が写真に写っていて6人の現3年生以外はみんな卒業した先輩たちだろう。神崎が言った。

「去年の合宿についてなにか資料はありませんか、って大島先生に聞いたらこのアルバムを貸してくれたんだ。サイト、あんまり馬鹿騒ぎするなよ。」

「俺はそんなキャラじゃないよ。それより松野とかの方があ意味危険じゃね？普段、密閉された空間で活動してるからさ。あ、条一郎もテンション上がるとはっちゃけそうだな。」

3人ではしゃいでいると「誰が暴れそうだった？」と言いながら松野と条一郎が教室に入ってきた。神崎が松野を見ると

「まっちゃん、興奮して地元の女子高生に手をだすなよ」とからかった。松野は

「僕はそんなキャラじゃないよ。それより条一郎のほうが、」とさつきサイトが言っていた事と似たようなことをいいだったので

部室が笑いに包まれた。そんなことをしているうちに3年の先輩が次々と部室に集まり、美術部の1学期最後のミーティングが始まった。

前の方に1年生、後ろに3年生という感じ座った部員達に黒板の前に立った佐々木ノマ部長がチョークで大きな字を書いた後振り返ってこう言った。

「それでは合宿の場所を発表します。今回の合宿地は函館！」

後ろの席の鶴野舞先輩がわざとらしく「おー」と声を挙げた。実は事前にみんな今回はどこで合宿が行われるかを知っていた。函館はウチの

学校から大体30分くらいだ。先輩の話によると函館の宿泊施設に泊まり2日間自由に絵を描くらしい。俗に言う「写生大会」という

ヤツで2日目は美術部顧問の大路地先生がクロッキー講座を開いてくれてみんなに絵の描き方を教えてくれるそうだ。クロッキーって

なんだ？ノマ部長に質問すると棒に墨をつけて描くことだそう。へえ、そんな描き方もあるのか。ノマ部長の話が終わると

舞先輩が口を開いた。

「当日は雨降らなきゃいいよね」。雨だと去年みたいに室内で模写だから」

「明日は降水確率10パーセントだって。うわ、29度もありやが

るよ。」

三上悠人先輩が携帯電話を見ながら言った。本土と違い、7月に最高気温が30度を超えることが珍しい道南では

外で絵を描くには厳しい状況になるだろう。日焼け止め買わなきゃな」といっている舞先輩を横目に美術部代表で英語教師の大島先生が切り出した。

「明日は9時に恵港^{えこう}に集合ね！1分でも遅れたスチューデントは乗せていってあげないからね！ハッハッー！」

何が面白いのかわからないがとりあえず遅刻はNGだそうで、絵を描くのに必要な道具を持つてくること、おやつは300円までとか明日の持ち物について大島先生は説明してくれた。先生の話が終わるとノマ部長が

「じゃー今日のところは解散！みんな明日は遅れないでね〜」

そういうとそろそろとみんな部室を後にした。今日は部室にクーラーが付くため業者がくるらしい。サイトは学校にクーラーが付くなんて

非現実的だと思っていたがこれは大路地先生のポケットマネーで付くことになったらしい。先生、グッジョブです。

サイトは階段を降りようとしている伊達詠進先輩に声を掛けた。

「先輩、明日はとうとう待ちにまつた合宿ですね！先輩達の絵、楽

しみにしてます！」

サイトがはつらつとした声で言うと詠進先輩は難しい顔をしながら、

「うん、明日は僕らにとって最後の合宿だからね。おおいに楽しむことにするよ。」

と作り笑いを浮かべながら言った。いつもの詠進とは明らかに様子が違ったがサイトは真夏の陽気でそのことに気付かなかった。

合宿ミーティング（後書き）

合宿では函館に行くそうです。どんな感じになるか、楽しみだな（日本語変）。

ノマの告白

次の日サイトは恵港と呼ばれる合宿の待ち合わせ場所である港に立っていた。

恵港は海岸通りにある休憩所のようなところでマリンスポーツや函館に向かう人などがたまに立ち寄る程度で辺りには

ほとんど人が居なかった。待ち合わせの時間より早めに来てしまったらしい。サイトが周りを見渡していると公衆トイレから

ノマ部長がお腹をさすりながら出てきた。サイトが挨拶をすると、ノマ部長は恥ずかしそうに手を振って挨拶を返した。

「ちょっと、早く来すぎちゃいましたね。他に誰も来てないみたいですし。」

サイトが言うと、ノマ部長が

「わー、ウミネコがいるー。サイサイ、ちょっと行ってみようよ。」

といってサイトのシャツのすそを掴んで待ち合わせ場所と反対側の海岸の方に歩き出した。サイトは相変わらずのノマ部長の突飛な行動に慌てながらもとんとんと歩く女の子と青い海の上を飛ぶ鳥を見つめた。裾から手を離すと彼女は言った。

「ねえ、ウミネコって、にゃーにゃー鳴くからウミネコっていうんだってー。知ってた？」

無邪気に笑う部長を横目に、

「あれはカモメじゃないですかね。」とサイトがいい、「いや、ぜったいウミネコだって!」「鳴き声以外に見分け方ってあるんですか?」

「><・・・」ノマ部長が少し黙った後に視線を対岸の釣り人に移しながら言った。

「サイト君だっけ?発表会の時ネコの絵を描いたの?」

ノマ部長の急な問いかけに少し驚いたがサイトは発表会の緊張感が蘇った。はいそうです。というとノマ部長が続けた。

「わたしも1年生の発表会の時ネコの絵描いたんだ。あの時は1票も入らなくて帰りにひとりで泣いちゃったな!。」

突然の告白に驚いたが、サイトはノマ部長がなぜ自分に投票してくれたのかがなんとなくわかってきた。

「1番票が入ったのってサイト君だったよね?先生やみんなもすごいってホメてたよ。あたし達がいなくなっても大丈夫だよね?」

サイトの口からえっ、と言葉が漏れると後ろの方から車のエンジン音と大島先生のカン高い声が響いた。

「あなた達、こんなところにいたのね!早く乗らないと置いていくわよ!ハッハッ!」

サイトとノマが大島先生の白のハイエースを見るともう他の部員達は全員車に乗り込んでいた。どうやら少しだけ待ち合わせポイントを間違えていたらしい。ノマ部長が助手席に乗り、サイトが1年生部員に部長と2人つきりでいたことをからかわれながら後ろの席に座った。

12人乗りのワゴン車が合宿地である函館を目指して動き始めた。

合宿はじまる（前書き）

この小説とあわせてブログもやってるので興味のある方はのぞいてみてください。

合宿はじまる

函館に向かう車に乗った美術部員達はそれぞれにおしゃべりを始めた。函館に行くのはひさしぶりだの、緊張しすぎて気持ちが悪いのだのおもいおもいに部員がしゃべっていると大島先生が急に振り返って発言した。

「みんな、絵を描く道具を持ってきた？・・・まさかフオゲットしてきた生徒はいないわよねー」

舞先輩が代表して「はい、みんな持ってきてます。」と手をぶらぶらさせながら答えた。短めのスカートに右手薬指に指輪、

匂いの強い香水をつけている。この先輩は函館で男でも引っかけつつもりなのだろうか。山田^{やまだけいこ}蛸子という女の先輩を挟んで隣の三上先輩が言った。

「いやー詠進、俺達も今回で最後の合宿だねー。高校生活最後の夏を満喫しようぜー」

色付きメガネに花柄のシャツを着てニヤニヤしている三上とは違い、詠進は時々考え込むような仕草を見せていた。が、1年生達は

そのことに気付かず松野の変な服装にツツコミを入れていた。

「だから今時ベレー帽にネルシャツは無いって。まっつんのせいで俺らまで変なヤツらだと思われんじゃん。」

「絵を描く時はベレー帽は必須でしょう。それに日よけにもなるし便利なんだって。」

いつも通り神崎と松野が口げんかを始めたので、サイトは「あゝもう、つきあってらんねえな！」と言い、持ってきたPSPの

起動スイッチを引き上げた。隣でバイオレンス漫画を読んでいた大和がPSPの画面を覗き込んで言った。

「あ、ワンダーハンターの最新ゲーム買ったんだ・・・今度俺も買うから一緒に通信プレイしようよ・・・」

ワンダーハンターとは今月発売したばかりのPSPソフトだ。母の知り合いから「臨時収入」が出たため6000円近くもするゲームを

買うことができた。そしてその話には続きがあり、

「お母さんね、サイトがこないだの発表会で優勝した事をみんなに話したら知りあいの1人が油絵セットを譲ってくれたの。これでサイトもみんなと同じ様に油絵が描けるよね。」と言ってサイトに油絵セットをくれたのだった。

サイトは最初のうちはすごく嬉しかったが、譲って（中身は新品だったため買った物だろう）くれたのがアイツだというのに勘付くと少し複雑な気持ちになった。俺はそんなことぐらいじゃお前にはなびかねえぞ。まあ今度の大会ではありがたく使わせてもらうけどね。

サイトは独り言を言いながらPSPをしまい、今回の合宿の写生大会で使う水彩セットと画用紙がちゃんと準備できてるかチェックし

始めた。

ぼうつと外を眺めていた条一郎が「おい、函館にはいったぞ」と言い、矢印のような頭をしたイカの看板を指さした。

函館はイカの名産地？らしい。どことなくエキゾチックな雰囲気がある町並みを通り車は急な坂道の途中にある宿泊施設の駐車場に入った。

すると宿泊施設の係員らしき人が出迎え、笑顔でおじぎをした。今回2日間お世話になる施設の

名前は「ひまわり」という名で、全道大会に訪れる文化部の宿泊拠点として営業しているらしい。今回の合宿の運営費は部員達の

部費の他に生徒会による活動予算から支払われていた。特に今年は詠進先輩が去年全国大会出場を果たしたため例年より多めの予算がでたようで「みんな、伊達君に感謝しなさいよハッハッ」と大島先生が車の中で言っていた。

部員達が車から降りると冷房が効いていた車内とは違いうだるような熱気が夏の日差しから感じられた。まだ昼前なので写生会を

始める頃にはもっと気温が上昇しているだろう。全員が施設内のスリッパに履き替えて廊下を集まるとこの「ひまわり」の代表と思われる壮年のおじさんと

あいさつがてら大島先生は話し始めた。話が長くなりそうなのでサイトは隣にいた三上先輩に話しかけた。

「去年はどんな塩梅^{あんばい}で合宿は行われたんですか？」

「そーだね、まず全員でミーティングがあつて、その後に泊まる部屋を決めてそれからみんな絵を描き始めるって感じかなー。去年は雨だったから室内で大路地先生が持ってきた静物の模写だったけど今回はこのお天気だし外で描くことになると思うよ。

帽子とか持ってきてくりやよかつたなー。」

と三上先輩は答え、松野が被っているベレー帽を見てふふん、と鼻で笑った。笑われている本人はその事に気付かず玄関に飾られていた暗いタツチの崖の絵を興味津々に見つめていた。サイト達の話聞いていた神崎が口を開いた。

「函館は観光名所だけあつて色々絵を描くポイントがありそうですね。まずこの施設の上にある函館山。この近くにあるハリストス教会。

海岸沿いにある赤レンガ倉庫。俺ん家の近所にはたまねぎ畑くらいしかありませんからね。」

神崎は自分の住んでいる菜苗町^{ななえちやう}を皮肉って笑いながら言った。サイトが思い出したように外を眺めている詠進先輩に聞いた。

「先輩、函館にはチャーミーグリーン^{チャーミーグリーン}のCMで使われた有名な坂道があるんですね？是非先輩が描いた坂道を見てみたいです！」

サイトは初めて学校の玄関先でみた詠進の「風たちぬ通学路」に出会った感動を思い出して目を輝かせた。しおさい高校の田舎道

の坂道とは違い、チャーミーグリーンチャーミーグリーンの坂は綺麗に舗装され、眼下には海が広がっているため絵のモデルとしては最適だろう。

詠進はサイトの高いテンションに押されながら「ああ、じゃあ今回はそこを描いてみようかな」と答えたため、

サイトはうおっしゃー、と歓声を挙げた。あの絵と同レベルの絵に再び出会えるのだ。まだ見ぬ大作にサイトの胸は震えた。

そうこうしているうちに大島先生とひまわりの代表の話が終わり、部員達は大きめの会議室に集められた。その部屋の中央には英字新聞を

読んでいた美術部顧問の大路地先生おおろじが座っていた。いよいよ始まる夏の合宿にセミが号令をかけたように一斉に鳴き始めた。

合宿はじまる（後書き）

いよいよ、という感じでSea side Art clubの夏の合宿がスタートします。

この小説のタイトルの由来ですが、前作Sea side Art clubの続きという意味とシサクに入部したサイトの物語、という意味合いで名付けました。今後ともよろしくお願いします。

はじまりの合図

部員達が会議室に入るとノマ部長が大路地先生に「先生！いつの間に来てたんですか？」とびつくりしたように聞いた。

大路地先生は持っていた英字新聞を畳むと、「昨日の昼から来てたわよ。ここの近くの学生の絵も観てみたかったし、

なによりもここからの風景が素晴らしくて。老後はここで暮らしましょうかね。」と笑みを浮かべながら光が乱反射する深い青の海を

見ながら答えた。大路地先生はしおさい高校の生徒以外にも絵を教えているらしく、函館の美術部員達の絵はレベルが高いと

言っていた。その学生達と全国大会への出場権を争うのかと思うと緊張感が部員達の中に生まれた。この様子を大島先生は察知するとふふん、と笑いながら会議室の前の方に立ってみんなに聞こえるようおおきな声で言った。

「これからSeaSideArtClub夏の合宿を始めます！予定としてはこれから外で絵を描いた後、ここ、『ひまわり』で食事と入浴をして就寝。2日目は午前中に大路地先生のクロッキー講座があります。その後外で今日描く絵を完成させて修了となります。それじゃノマちゃん、あとは任せたわよ！」

そういうと大島先生は指名されてしどろもどろになっているノマ部長の横を通り過ぎて会議室の外に出て行った。部員達が乗ってきたハイエースはレンタカーで、明日帰る時に借りる手続きをしなければ

ばならないというようなことを先生は車内で言っていた。

ノマ部長は隣の舞先輩と小声で話し合いをした後、部員達に言った。

「えーと、とりあえず夕食の時間は6時だから今日は5時くらいまで外で絵を描いて続きを明日やるって方向でいいかな？」

昼食は各自自由に採ること。あ！その前に泊まる部屋のメンバーを決めないかね！・・・タカジョー何ニヤニヤしてんの？女の子は3人だから男子だけで部屋割りをきめてよね。それじゃわたしたちは泊まる部屋をみてくるよん♪」

と言に残すと荷物を持ちぺたんぺたんとスリッパを鳴らしながら女子チームは上の階にある宿泊用の部屋に向かった。女子と一緒の

部屋になれなくて残念がる条一郎をなだめ、残った男子部員は三上先輩の提案により、じゃんけんのグー&パーで2つの部屋を4人ずつの

グループで決めようと言った。何回かじゃんけんをして2つのグループが出来上がった。

301号室

三上悠人 伊達詠進 斉藤サイト 大和健

302号室

大清水学 神崎智紀 松野良風 高城条一郎

部屋のメンバーを書いたメモを大路地先生に渡すと先生はにこやかに頷いた後、「すこし函館を観光してくるわ」と言いバッグを抱え

外出する準備をした。あまり面識のない大清水先輩と一緒に部屋になった神崎がぎこちなく挨拶をすると大清水先輩が

「こちらこそよろしく。かんざきくん。」とキリつとした表情で返した。今日の大清水先輩はいつもの挙動不審な感じではなく、

なにか決意を決めたようなビシッとした空気感をジェルでバッチリ固めた髪型が物語っていた。三上先輩はにやりと笑うと

「俺達も泊まる部屋に行ってみようか」と言い、部員達は荷物を持って3階へ続く階段をのぼった。

宿泊施設「ひまわり」の3階にあがると、廊下の窓が開いており山の木々の深い香りと磯の潮風の匂いが同時に鼻腔に流れてきた。

ちょうど海と山に挟まれているからだろう。サイト達は女子チームがいる角部屋の303号室をちらっと見た後自分達の部屋のドアを開けた。

泊まる予定の部屋は大体10畳くらいの小部屋で2段ベッドが2つあるだけの質素な洋室になっていた。ちょうど4人ずつの

グループだしちょうどいいだろう。荷物を置いていると隣の部屋から松野のうわー、という声が聞こえてきた。初めての合宿ということとで

はしゃいでいるのだろう。三上先輩がノマ部長にもう外に出て写生会を始めてもいいのか聞いてくると言って廊下に出た。

部屋に残っていたサイトがカバンからキャンバスノートを取り出し

た詠進先輩に聞いた。

「先輩、今回は水彩画を描くんですか？」

「い、いや。今回はあまり時間がないから鉛筆でデッサンするだけにしておくよ。サイト君は水彩画かい？」

「はい！全道大会にむけて油絵を描こうかと思ったんですが2日間という事で水彩画にしました！大和も水彩画だよな？」

サイトが聞くと後ろにいた大和が首を縦に振った。詠進先輩が描く絵が色付きの絵ではないことが残念だったがレベルに高い先輩達と過ごせるこの期間は絵の技術をあげるのには絶好のチャンスだとサイトは考えていた。前回絵を描いた発表会から多少ブランクはあるがすぐにカンを取り戻せるだろう。そう思いながらサイトは大和達と一緒に水のみ場に行き、水彩セットの容器に水を汲み始めた。

1年生部員を見渡しながら神崎が言った。

「みんな、どこを描くか決めた？俺はハリストス教会を描こうと思ってるんだけど描こうと思ってるやつ、一緒に描こうぜ。」

神崎が水道の蛇口を止めるとサイトの隣にいた大和が手を挙げた。条一郎は海岸沿いまで降りて赤レンガ倉庫を描きたいと言った。

松野はどうするのかと聞くと「まだ考え中」と答えが返ってきた。「単独行動で不審者と間違われんなよ」と神崎が冷やかした。

サイトもまだ何を描くか具体的には決まっていなかった。詠進先輩と一緒にチャーミーグリーンの坂を描こうとも思ったが今回は

建物の絵を描いてみたいと思っていた。こないだテレビでやっていた「美の巨星たち」という番組でユトリロという画家の作品の

特集を見てサイトは建築物の絵に興味が沸いていた。夏の大会で建物を描くかどうかは今回の出来次第で決めよう。サイトがそんなこと

を考えながら玄関で靴を履き替えていると立ち膝でくつひもを結んでいた大和のシャツから携帯電話が落ち、水彩バケツの中に

入ったので一同は大爆笑した。大和は無言で携帯を拾い上げ、故障していないことを確かめると安心したようにほっと、息をついた。

サイトは他の部員達と分かれ、水彩セットを抱えながらセミが鳴く山の近くまで坂道を登った。俺も一緒に教会を描けばよかったかな。

そんなことを少しだけ思いながら日の当たる坂道の中央で額に浮き出た汗をぬぐった。

はじまりの合図（後書き）

次回でやっと絵を描き始めます。長い目で見てやってください^^;

新たなる出会い

他の部員とわかれ、1人単独行動をとっているサイトは水の入った水彩バケツをぴちゃぴちゃと揺らしながら坂の上の住宅街を歩いていた。

何か絵のモデルになるようないい建物はないものか。サイトが辺りを見渡すとタイム・バートンの映画に出てきそうなオシャレな一軒屋が見えてきた。

壁の表面にツタが生えたトンガリ頭のその家は隣の家とは明らかに違う雰囲気醸し出していた。小さな水飲み場から青い模様の

小猫がトコトコと歩いてきて入り口の前に座り込んだ。サイトはこの家の構図を見て描くならこの家しかない！と直感的に思った。

サイトはその家の向かいの駐車場に水彩セットを置き、砂利の上に持参したマットをひいて正面の洋風の一軒屋の下書きを始めた。

時々猫が寝返りを打つ以外は特になんの変化もなく目の前の洋館と向き合えたが、ひさしぶりに絵を描き始めたのでなかなかバランスよく

家の構図を取る事が出来なかった。サイトが戸惑いながら絵を描いているとぼーん、と大きな音が教会の方から聞こえてきた。

午後0時を伝える鐘だろう。パレットに絵の具を乗せようとしていると家のドアが開き、中からこの家の住人と思われる女の子が出てきた。

サイトはやばつ、と声を挙げた。出てきた女の子は見たところ自分と同じくらいの年頃だ。それに制服を着ているということは近所の学校の生徒なのかもしれない。少女は玄関に座っていた猫の頭をなでると、マットから立ち上がったサイトの方を見つめた。

やばい、このままだと不審者がストーカーだと思われる。サイトはどちらかという人見知りをする性格だったが今回ばかりは仕方ない。

身の潔白を証明するためにも勇気を振り絞って自分の方から少女に声を掛けた。

「あの、僕はしおさい高校の美術部員の斉藤サイトです。たまたま通りがかったらすごくセンスの良い家があったんで描いてみようと思ひまして！迷惑だったらすぐ移動します！怪しい者ではありません！信じてください！」

サイトが身振り手振りを加えながら必死に言うと、少女は笑みを浮かべこう言った。

「別に家の外観を描くだけだったら構わない。私はこの家の住人の雨宮慈雨^{あまみやじう}。両親は今日、外出してるから、好きなだけこの家を描いてくれて大丈夫。」

サイトは目の前の少女がアニメのキャラクターのようなしゃべり方をしたので少し可笑しかったが自分を信じてもらえたことが嬉しかった。

雨宮というこの家の住人はボブカットを更に短くしたショートヘアで、毛束が外側にハネている変わった髪形をしていた。

かばんを抱え直すと整った顔をサイトに向けこう言った。

「絵が出来上がったら、その、私に見せてくれる？」

最後の方が聞き取りづらかったが言葉の内容を理解するとサイトは「はい！もちろんです！」とおおきな返事をした。

坂を下っていく少女の後姿が小さくなるとサイトは緊張が解け、ふー、と息を吐きながらマットの上に座った。

他人の家を描くときはちゃんと許可をもらわなきゃな。それにしても、かわいいコだったなあ。おっと、それよりも期待に答えられるだけの絵を描かないと。

猫が再び玄関に座るとサイトは新しく画用紙を取り出し集中力を高めて雨宮家の下書きを始めた。

新たなる出会い（後書き）

雨宮という女の子が出てきました。この子がサイトにどんな影響をあたえていくか、作者も楽しみです。

松野と詠進（前書き）

写生大会が始まりました。

松野と詠進

他の生徒と別行動をとっていた松野良風は函館山の登山口の入り口まで来ていた。そこから振り返ると青い海と住民がすんでいる住宅街が

一望できた。夜になると100万ドルの夜景と呼ばれる国内きつての絶景だ。松野はここから見える景色を描くことにし、近くにあったベンチ

に水彩セットを置くとゆつくりと腰をおろし手に持っていたペットボトルを口に注いだ。光を遮る物のないこの場所で絵を描くという事は

日差しとの戦いになりそうだ。松野は絵を描く準備を整えると鉛筆を風景に向け、大体の構図を測った後キャンバスノートに下書きを始めた。

発表会の後、松野はその結果に納得がいかなかった。絵の技術では間違いなく自分が一番だった。それは絵の作者である自分以外の

人が見ても確かだ。それなのに優勝することが出来なかった。不安を打ち消すようにキャンバスに油絵を塗りたくった。そんな荒れた心

では人を感動させる絵は描くことはできない。といわんばかりに松野の絵は方向性を失ったバランスの悪い絵になっていった。誰も参加

しなくなつた美術室の真ん中で松野が頭を抱えていると、きい、と

ドアが開き3年の伊達詠進先輩が教室に入ってきた。

松野は先輩に挨拶をすると、再び自分の絵に向かって絵を描き始めた。詠進先輩はイスに座って黙って松野を見ていたがしばらくして口を開いた。

「松野君、君はやっぱり今回の結果に納得していないのかい？」

松野は聞こえないようなふりをして筆を握った。

「みんな君の絵を認めているよ。実際君に票を入れたのは顧問の大路地先生と、最初は君の絵を馬鹿にしていた舞君。君が他の1年生と比べて1番絵がうまいのはみんな承知の事実だよ。」

松野は突然自分が褒められたのでびっくりしたがどうしても気になつていた事を詠進先輩に聞いた。

「伊達先輩は、どうしてサイトの絵に投票したんですか？」

松野はおそろおそろ声をだすと詠進はすこし考えた後こう言った。

「サイト君の絵は他の1年生の絵と比べて構図のとり方が絶妙だった。それに他の1年生の作品が一つの対象を描いていた事に対してあの絵は鏡を見る猫と鏡の中の猫の2つの対象が描かれていた。本人は単なる偶然だと思っているけどこれは狙って描けるようなことじゃない。僕はサイト君のセンスを評価して彼に投票したんだ。」

松野は詠進がちゃんとした理由をもってサイトに投票したことがわかって自分が抱えていた最大の疑問が解消した。

するとどこからともなく涙が溢れてきた。泣き顔を詠進先輩に向けてながら松野は言った。

「先輩すいません。ぼく、詠進先輩がサイトと仲良しだから票をくれたのかな、と思って。えぐっ、先輩は僕の絵がきらいだからぼくに投票しなかったのかな、って思って。疑って、ほんとにすみませんでした。」

泣きじゃくる松野の肩にぽんと手を置くと詠進先輩は言った。

「松野君。君のアトライフは始まったばかりだ。ときには壁にぶつかるともあるだろう。でもその壁を乗り越えてこそ真の喜びが待ってるんだ。今回の結果をバネにして頑張ってくれ。」

詠進の言葉を受け取ると松野は「はい！ありがとうございます！」と涙を拭って返事をした。松野がある日の放課後の出来事を思い出して

いると教会の方からぼーんという鐘の音が聞こえた。もう自分の絵や人を疑ったりしない。僕は自分のやり方で全国大会を目指す。

松野は固い決意とともにキャンバスノートに筆を走らせた。

松野と詠進（後書き）

この回は前回の大会でサイトが優勝した理由がわかる話なので、2部が始まったらぜひ書きたい、と思っていた話のひとつです。次話からすこしペース緩めます^^;

大和の過去（前書き）

大和・神崎話です。

大和の過去

「おい、やまちゃん、あれ見てみるよ！」

神崎と一緒に教会の絵を描いていた大和は神崎が突然教会の上の方を指差して叫んだのでその指先を追った。

教会の上の鐘がある場所におじさんが歩いていき木槌のようなもので鐘を大きくぼーん、と叩いた。腕時計で時間を確認すると午後0時

を指していた。大和はフフッと笑うと自分が描いていた絵に鐘を叩いた教会の関係者らしき人物を描き足した。

そのおじさんは満足した表情を浮かべ踵を返して歩き出すと大和達の視点からは見えなくなった。その様子を一挙手一動見ていた神崎が言った。

「へー、ああやって人力で鐘を突いてるのが。いいもん見させてもらったわー。」

大和もうんうんと頷くと神崎の腹の虫がぐうぐう鳴き始めたので彼らはコンビニで買ったサンドイッチを食べ始めた。大和のリュックから

車内で読んでいたバイオレンス漫画が出てきたので気になっていたことを神崎が大和に聞いた。

「やまちゃんはほんとそーいう漫画好きだよなー。なんかそーいう

世界にハマるきっかけとかあったわけ？」

大和はフフッと笑ったあと聞きたい？と言ってきたので神崎は教えてよ、と言った。

「俺が幼稚園の時近所のアパートで殺人事件があつて．．．犯人は捕まったけど死体が見つからなかったんだ．．．俺が1人で近所の公園で遊んでいたら．．．ブランコみたいにぶら下がったタイヤの中に．．．女の死体の一部が．．．」

「イヤーーーーーーー！もうやめてッ！ほんとッそっいうの、わたしムリだからッ」

神崎と大和と一緒に昼食を食べていた山田蛭子先輩が大和の話の途中でいきなり大きな声で叫んだ。神崎があぜんとしていると蛭子先輩は

耳を塞いでどこかへ走り出してしまった。ニヤニヤと笑みを浮かべている大和に神崎は尋ねた。

「なあ、いまの話、ほんと？」

「う・そ」

口を突き出して大和は笑った。神崎はやれやれ、と額に手を置くとすっかり遠くの方に逃げてしまった蛭子先輩を呼び戻しに行った。

大和の過去（後書き）

仕事が忙しいですが、頑張ります！

フィーチャリング条一郎2（前書き）

更新記録が途切れました。仕事が忙しすぎる．．．まさかの条一郎
回ふたびです。暖かい目で見てやってください。

フィーチャリング条一郎2

やあ、俺はしおさい高校美術部一年の高城条一郎だ。

俺は宿泊施設「ひまわり」の近くで絵を描くという他の一年部員と別れひとり海岸沿いの赤レンガ倉庫と呼ばれる観光名所を描いていた。

ときおり観光客らしき人に写真を撮ってもらえないかと尋ねられる以外は誰も俺のことを気にせず俺の近くを通り過ぎていった。

山の方からぼーん、と0時を告げる鐘がなったので近くでボートの絵を描いていたノマ部長と一緒に飯を食わないか、と誘われたが、

サイト達に見つかって冷やかされるのが嫌だったから断った。ちょっと後悔している。

俺がなれない手つきで筆を動かしていると近くで女の笑い声が聞こえた。声の主は舞先輩で、どうやら地元の学生らしき3人組に声をかけられたらしい。いわゆるナンパってヤツか。

俺は筆を置き、舞先輩が3人組に対してどういう態度をとるのが観察することにした。もし、「はあ？あんだ達の方であたしに声をかけるんじゃないわよ！シヨンベン臭い面下げて漫画喫茶にでもいってきなさいよね！」なんて言ったら面白くなりそうだ。

いや、もしそれで3人組みがキレて舞先輩に掴みかかりでもしたら

俺が助けに行かなきゃならないのか？それは少し怖いな。

あれ？舞先輩がポケットからペンを取り出してメモ帳の切れ端になにやら文字を書くのをひとりに手渡したぞ。そいつはうい、と紙を握った手を上に挙げるとにやにやしながらその場を立ち去っていった。？？？もしかして連絡先を書いたメモを渡したのか？

あの先輩、合宿にまで来て男を引っ掛けようってのか。とんでもないビ。チ女だな。俺は気分が少し悪くなったがこないだの発表会の事もあるし、再び真剣に絵を描くため目の前の赤レンガ倉庫と向き合った。

青春って・・・

サイト達美術部員が外で写生大会を行っているあたりがしだいに暗くなり始め、5時を知らせる「赤トンボ」のサイレンが鳴った。

部員達は宿泊施設「ひまわり」に戻り、あまり豪勢とは言えない夕食を食べ、決められた時間内に入浴を済ませそれぞれの部屋に戻っていった。備え付けの浴衣に着替えた三上先輩がみんなの顔を見渡しながらにやにやして言った。

「さあ、みんな夜も更けてきたし好きな女の子の名前でも挙げてくか。詠進は誰？」

「おいおい。そんな質問に真面目な詠進先輩は答えないだろう。サイトが思っていると短パン姿の詠進先輩がいった。

「僕は3組の北山さんかな。目も大きいし、すごくキュートだと思うんだ。」

サイトは詠進先輩の意外な返しに思わず飲んでいたスプライトを噴出した。あんた、キュートって・・・ゼーゼーと、息を切らしているサイト

に三上先輩は同じ質問をぶつけてきた。好きな女の子か、サイトは今日出会った雨宮という女の子のことを思い出した。少ししか会話出来なかったけどいい子だったな。サイトはみんなの顔を見渡すと恥ずかしそうに言った。

「いや、その、好きな女の子って言われても、すぐに浮かびませんけど・・・でも今日あった女の子とかいい感じだと思いました。」

今日あった女の子と聞いて三上先輩が「ええ？」とサイトの顔を覗き込んだ。いけね。焦って余計な事言っちゃった。明日も描く予定の

雨宮家にこの先輩がやってきたら面倒だ。サイトが動揺していると三上先輩の浴衣の携帯電話が鳴った。サイトがほっとしていると

三上先輩が携帯のメールをみながら、

「アイツ、とうとう腹くくりやがったか」と言った。

なんの事だろう？ サイトが隣でニシワラ・エレクトロニクスとかいう、つまらないお笑い芸人のネタをテレビでみていた大和の袖を

ちょいちょいと突付くと大和はそれに気付かずふふん、とステージ上で転げ回るニシワラを見ながら笑っていた。

三上先輩はおもむろに立ち上がるとみんなに聞こえるように言った。

「みんな、いまから海岸沿いの波止場までいくぞ。たぶん、すげえ面白いものが見られると思う。」

そついうと先輩2人は上にシャツを羽織り、外出する準備をした。サイトもテレビにかじりついている大和の頭をはたき、一緒にいく準備をした。面白いものとはなんだろう。サイトは暗い夜道を懐中電灯で照らしながら歩く先輩2人の後を歩いていった。

しばらくして波止場に着くと三上先輩がここで待ってようかといってサイト達4人は物陰に隠れた。

これからなにが起きるんだろう。すこしドキドキしてきた。

少し待っていると横断歩道を早足で横切る人影が見えた。対向車のランプがそれを照らすと、ジェルで髪型をばっちりきめ、緑色のス
ーッ

の襟を立てた大清水先輩が現れた。普段とはあまりにも違う気の入りにサイトは思わずぶつと噴出した。となりにいた大和が

笑っちゃわるいよ。とサイトに注意した。あんなにバッチリとした格好をして何をするつもりなのだろうか。波止場のベンチの前まで歩いた大清水先輩は落ち着き無くきよろきよろと辺りを見渡し始めた。ときおり大清水先輩が挙げる「・・・っひ・・・っひ」という

不気味な声が夜道に響く以外は何の音もしなくなった。一同が一動を見つめていると反対側からコンビニの袋をぶら下げたノマ部長が歩いてきた。あ！これはもしかして！ようやくこのイベントがなんなのかをサイトが悟ると大清水先輩はノマ部長に向かって

素っ頓狂な声を挙げた。

「ノマ！好きなんだ！」

「ごめんなさい！無理！ぜえゝたいに、無理！もう私に話しかけないで！バイバイ！」

大清水先輩が言い終わる前にノマ部長が叫ぶとそのままダッシュでサイト達が隠れている前を横切り、「ひまわり」の方へ走っていった。

詠進先輩が呆然と立ち尽くしている大清水先輩を見ながら行った。

「なんか・・・青春って・・・悲しい色だね・・・」

それを聞いた3人がうんうん、と頷いた。しばらく夜風にあたっていたから体が冷えてきた。もう一回風呂に入り直そうかな。

サイトは後ろを振り返ることなく「ひまわり」に続く坂道をのぼって今日はゆっくり休むことにした。

青春って・・・（後書き）

作者はスプライトが炭酸飲料で2番目に好きです（1位はジンジャーエール）。ニシワラ・エレクトロニクスは江頭2：50のような芸人だと思って読んでください。もう出てこないと思いますが^^；

ぼーいずとーく(前書き)

息抜き回です。

ぼーいずとーく

次の日の朝、サイトが洗面所で顔を洗っていると右隣に条一郎が眠たそうに目をこすりながらやってきた。

「昨日、なんか知らないけど大清水先輩がずっとすすり泣いててよ。全然眠れなかったんだ。」

サイトは昨日の波止場でのイベントを思い出して少しだけ可笑しくなりふふん、と鼻で笑った。あの大清水とかいう先輩、いつから

ノマ部長のことが好きだったんだろう。そしてこれからどうやって美術部員としてやっていくんだろ。サイトがぼんやりと

顔をタオルで拭きながら左隣で歯を磨いていた神崎に聞いた。

「ねえ、ともちゃん。いま好きな女の子っている？」

サイトの問いかけに神崎は口から歯磨き粉を噴出した。条一郎がおい、おまえそんなシユミが…とおののいた。別に神崎に告白するわけ

じゃないって。サイトがぼやくように言った。

「俺らもさー、高校生活始まってもう4ヶ月目じゃん？いくら文化部とはいえひとりでくらいカノジョが出来たやつが出てきても

おかしくないと思うんだ。男だけでつるんでるのも楽しいけどその、なんつうか、もてあますじゃん、欲求をさ。」

サイトが言わんとすることを条一郎が理解し、にやりと笑った。神崎も口をゆすぎながらそんなモンかね、と言った。

「その欲求を絵を描くエネルギーに替えるんだ。そうすれば僕達1年生だつて全国大会にいける。」

後ろの方から松野の声がした。お前は根っからのアーティストだよと、サイトが冷やかすと神崎も無言でうなづいた。トイレから出てきた

大和がそろそろ朝ご飯ができる時間だ。と言ったので1年生部員達は食堂へ向かった。今日は午前中は大路地先生のクロッキー講座があるらしい。そして午後は再び外での写生があるので、今日も雨宮さんの家を描かせてもらおう、とサイトは思っていた。

雨宮という子は出来たらその絵を見せて欲しいと言っていた。彼女ももしかしたら美術部員なのだろうか。昨日は少ししか話せなかったけど今日はもつと話が出来たらいいな。そんなことを考えながらサイトは朝食の玉子焼きを口に運んだ。

大路地先生のクロッキー講座

部員達は朝食をとり終わると、今日は大路地先生がクロッキーを教えてくれるということで宿泊施設「ひまわり」の会議室へぞろぞろと移動した。やはりノマ部長は清水先輩と少し距離を置いているようだった。会話はおろか、ノマ部長は清水先輩の方すら向こうとしなかった。サイトは昨日とはまったく違って意気消沈しかった大清水先輩の顔を見て少しかわいそうになったが、合宿という空気に飲まれて勢いで相手の気持ちも確認せず告白したコイツが悪いのだ、と思うようにした。

部員達が会議室に入るとテーブルの周りにイスが12個並べてあり、テーブルの前でカゴに入った果物をセットしている大路地先生がこつちを見てにこりとしたが、表情を切り替え部員達全員に聞こえるように言った。

「みなさんおはよう。合宿だからって気が抜けてる生徒が何人かいるようね。そんなことじゃ今年も全道大会までいけないわよ。ノマちゃん！」

大路地先生がいきなり大きな声でノマ部長を名指して叱りつけたので部員達に緊張が走った。そうだ。俺達は函館までピクニックに来たわけじゃない。夏の大会で勝ち進んで全国大会に行くためにこの合宿に来たんだ。部員達がこの合宿の意味を再確認するとノマ部長が

みんなを代表して言った。

「大路地先生、たしかに気が抜けていた部分がありました。今日は私達にクロツキーを教えてもらえないでしょうか。よろしく願います。」

他の部員達もお願いします！と言い、頭を下げた。その様子を見て大路地先生が口を開いた。

「そうよ。今回のクロツキーで一番必要なものは集中力よ。みなさんが気持ちを入れ替えて真摯な気持ちで絵に向き合えばきっと

素晴らしい絵が出来上がるはず。その気持ちで頑張ってちょうだい。」

先生の言葉を聞いてみんな、はい！わかりました！と大きな声で答えた。すると大路地先生は部員ひとりひとりに座る席を指定した。席は

11人の部員と先生を合わせた12席があり、サイトは時計で言うところの「2時」の位置の席に座るように言われた。部屋に入るとき

先生がいじっていた丸テーブルの上をチラッと見て、今日はこの力ごと果物を描くのか、とサイトは思った。

「足元に気をつけて！今日使う画材が置いてあるから。」

サイトが声に反応してえ、と振り返るとつま先に紙コップのようなものがあたり、中から墨のような液体がこぼれ出して近くにあった

画用紙の上に点々と色がついた。やべえ。サイトは急いで紙コップをひろい上げ、墨が零れた床をティッシュでふき取った。

「3時」の位置に座った舞先輩が言った。

「サイト君。墨は補充してもらえないから、そのつもりで。今回は少し気合をいれないとマズいみたいね。」

いつもはおちゃらけている舞先輩が口を真一文字に結んでいる。サイトは紙コップの中を確認した。

コップの中には全体の三分の一くらいしか墨が残っていない！やばい、どうする？この量であの絵が描き切れるだろうか？それに画用紙にはさっきこぼした墨が付いている。サイトはまだ始まってもないのにこのクロッキー講座において窮地に立たされていた。

大路地先生のクロッキー講座（後書き）

いきなりスリリングな展開になってきました。短時間で絵を描くには集中力が大事、集中力のない作者にとっては耳の痛い言葉です。^ ;

サイト、大ピンチ！

大路地先生が「12時」の席に座ると部員達全員の顔を見渡していた。

「いまからテーブルの上の静物画をみなさんと一緒にクロッキー（素描）していきます。時間は、そうね、いま8時半だから9時まで。それじゃあ、始めるわよ。」

「ちよつ、ちよつと、待ってください。」

神崎が慌てて席を立ち上がって言った。

「いまから始めるクロッキーというのはこの墨と割り箸の片側だけを使って描かないとダメなんですか？クロッキーをネットで調べたら鉛筆で人物を書くものだって言われてたんですが、」

「とにかく9時まで絵を描いてちょうだい。話はそれからよ。」

大路地先生が威嚇するように神崎に言ったため、神崎は納得がいかないような顔をしながら席に座った。サイトは足元に置き直した

墨の入った紙コップと割り箸の片方一本を見つめた。この割り箸に墨をつけて画用紙に絵を描くのか。大路地先生がはじめ、と声を

かけてテーブルの上の果物の素描会が始まった。サイトは画用紙の左端から真ん中にいたるまで付着している黒い点を睨みながら墨を

付けた割り箸を画用紙と上に置いた。ん、なんだこれ。筆と違って全然紙に色が付かないぞ。慌てて他の部員達を見渡すと他の1年生部員

達もサイトと同じく苦戦しているようだった。条一郎にいたっては開始5分だというのに「お手上げ」というような態度を見せている。

サイトは隣で絵を描いている大路地先生の動きを確認した。割り箸を絵の対象の果物に向けて画用紙との距離間をはかり、割り箸の角を使ってすいすいと画用紙の上を黒い線が走っていく。そうか、こうやって絵を描くのか。サイトは見よう見まねで割り箸の角を使い

カゴに乗ったりんごの輪郭を取ろうとした、が、線が太くなったり、細くなったりして安定した色が出せない。やばいやばい、

時計を見るとあと10分しかない。サイトの頬に汗がたつた。部員達は思い思いに中央のテーブルの上の果物を描いていった。

大路地先生のポケットにあったストップウォッチが鳴り、「はい、やめ!」と先生の号令がかかると部員達はみんなふうーと息を吐き出した。

「いまからみんなが描いた絵を見せ合って、どこを良くしたらいい絵になるか話し合ってちょうだい。10分後にまた新しい画用紙で再開するわよ。」

先生がそういったため、ノマ部長の号令で部員達はテーブルの周り

に集まって30分で描いた絵を提出し始めた。

やはり3年生の絵は過去2年間の経験があるからか、割り箸の角や中央を使つてうまく果物の輪郭やカゴの全体像をとらえていた。

詠進先輩の絵にいたってはちゃんと果物に陰影までついていた。1年生でも松野や大和の絵はうまく特徴を掴んだ絵を描いていた。

大和がサイトが描いた絵をみようとする、サイトは画用紙を後ろで手を組むように隠した。神崎は今回は割り箸と墨の使い方に戸惑いあまり上手く線が引けていなかった。条一郎も同じような問題を抱えているような絵だった。

サイトの絵はというと、最悪だった。

全体的に絵の対象をとらえきれていない上に時間がなくて焦ってしまった為、子供が描いたようなぐちゃぐちゃな絵になってしまった。最初に墨をこぼしてやる気をそがれてしまったと言いつてもこれはとても人に見せられるレベルではない、と思った。

空気を読まずに三上先輩が「サイト君の絵、見せてよ」と言つて来たのでサイトは慌ててこの場を逃げ切る理由を考え始めた。

「ちょっと、俺、トイレにいきます」とサイトが言おうとする、と後ろの方に座っていた大路地先生が言った。

「サイト君。あなたには今回のクロッキーは少し難しすぎたみたいね。次はみんなが描いているのを観察してなさい。それじゃみなさ

ん、画用紙を配るわよ。」

サイトは先生に自分の絵が見られていた事を知ると頭が真っ白になった。俺だけ次は見学かよ。サイトはすこし惨めな気持ちになった。

画用紙を他の部員に配り終わると大路地先生はストップウォッチを持ち

「次は10時までね。はじめ！」と号令をかけた。

今から1時間近く見学するのかよ。サイトは湧き出てくるマイナスの感情を抑えながらイスに深く座り込んだ。

サイト、大ピンチ！（後書き）

実際のクロッキーとは少し異なります。作者が学生時代に経験した「制限のある状況」でのクロッキー教室を書きたかったものでこういう形になりました。おかげで「集中力」はついた．．．と思います（笑）

再び雨宮家へ（前書き）

大路地先生のクロッキー講座が終わりました。

再び雨宮家へ

正午過ぎ、サイトは昨日と同じように水彩画セットを右手に持ち、函館の住宅街をふらふらと歩いていた。

大路地先生のクロッキー講座は1時半くらいまで続き、その後サイトはみんなに昼食に誘われたがとてもみんなと一緒にご飯を食べる気

にはなれなかった。そのくらい自分の実力のなさを大路地先生から思い知らされた。

太陽がちょうど頭の上で輝きだし、気温がぐんぐん上昇している。北海道の夏とは言え、今日は真夏日になるだろう。外で絵を描くのは

あまりいいコンディションではないが汗をかく事でネガティブな気持ちをすこしは流せるだろ、そんな風に前向きにサイトは考える事にした。

サイトは住宅街のはずれにある洋風の雨宮家を視界に捉えた。昨日はこの家の外観を描かせてもらったがうまく構図を取ることができなかった。

サイトは水彩画セットから水を入れる容器を取り出し玄関先の蛇口から水を注いだ。いけね、家の人にこの家を描く許可をもらわなきゃ。

ごほん、と咳払いをして深呼吸をしたあと、インターホンを鳴らす

としばらくしてはい、と女の人の声がした。

「すみません、昨日この家を描かせてもらった者ですけど今日も描かせてもらっても大丈夫でしょうか？」

サイトが早口で言うと、家の中からくす、と笑い声がしたような気がした。「大丈夫、構わない」と透き通った声でマンガのセリフのような

言葉を聞くとサイトは少しだけ安心した。インターホンごしで話したのは昨日会った雨宮慈雨。

「あ、ありがとうございます。それでは外で描かせてもらいます。どうも！」

誰もいないインターホンの前でおじぎをすると水の入った容器を持ち、向かいの駐車場の砂利の上にマットを引き、雨宮家が一番良く見える

場所を探してうろつろと歩き回った。しかるべくポイントを見つけるとその場所までマットを動かし、その上にサイトは腰を下ろした。

無理に家全体を絵の中に入れる必要はない。この家で一番描きたいポイントは三角頭のエントツだ。その上に流れる雲を描こう。

今日描く絵の構図は決まった。サイトが鉛筆で画用紙に下書きをしていると家の中から制服姿の雨宮慈雨が出てきた。突然の出来事にふっと

サイトは立ち上がったが、ここは雨宮の家。中の住人が出てくるのは当然のことだ。サイトは雨宮にぺこりと頭を下げた後、

「こ、こんにちは！今日も学校？」となるべく気さくな感じで話かけた。すこしでも距離を埋めたいと思ったからだ。

慈雨はふっ、と笑うと、「うん、これから部活」といいサイトの方へ近づいてきた。そのまま駐車場に入りサイトの横まで歩くと

サイトが絵を描いていた画用紙を覗き込んだ。やわらかい雨宮の匂いにうつとりしそうになったが「ま、まだ描きかけなんで見ないで」

と言い、サイトは持っていた絵を背中に隠した。雨宮さんは再び笑みを作ると「そう、すこし残念」といって踵を返しそのまま駐車場を

出ようとした。サイトは何か言葉を掛けようとしたがいい言葉が浮かばなかった。頭をかりかりとかき始めると雨宮の後姿が遠くなっていく。

まずい。このままだと描いた絵をあの子に見せられなくなる。地元から函館は結構遠いし、わざわざ会いにくるほど仲もまだ良くないし

どうすればいいんだろ。サイトはその場に立ちすくんでいたが自分の本来の仕事を思い出し、顔をぱん、と叩くとマットの所まで戻り

再び絵を描き始めた。でも雨宮のことが脳裏をよぎってなかなか筆が進まなかった。しばらくすると女子高生らしき女の子が目の前

家に入ろうとしているのが見えた。筆を横の容器の水につけていたサイトが振り向くとそこには雨宮慈雨がいた。

「あれ？学校は？」

サイトが聞くと雨宮が

「ちよつと、忘れ物」

と恥ずかしそうに答え、家の中に消えていった。忘れ物か。しつかりしてそうに見えて意外にぬけた所があるんだな。

そんなことを思っているとドアが開き大きめのスケッチブックを持った雨宮が出てきた。やっぱり彼女も美術部員だったのか。

「あ、雨宮さんも美術部員なんだ？お、おれもおんなじ美術部員」

「知ってる。昨日聞いたから。今度の全道大会、函館で開催だからその時に会おう」

雨宮さんの意外なきりかえしに少し驚いたが一か八か、サイトは勇気を振り絞って聞いてみた。

「あ、あのさ、出来上がったらこの絵を見せたいからさ、よかったらアドレス交換してくれない？」

すこし強引な形かもしれない。雨宮さんは振り返ると少し恥ずかしそうにスカートのポケットから携帯電話を取り出した。

これでサイトは雨宮さんに絵を見せる約束をとりつけることが出来たと同時に、他の学校の美術部員と接点を持つことが出来た。

彼女に名前のつづりを確認するとサイトの携帯には新しく「雨宮慈雨」が登録された。慈雨もサイトに名前のつづりを聞くと

彼女の携帯に「斉藤才斗」が登録された。彼女はなにかに気付いたように含み笑いを始めた。サイトが聞くとこう言った。

「私達つてどっちも繰り返し系の名前なんだな、と思って。これからよろしくね、サイト」

いきなり呼び捨てにされたので面食らったが

「こちらこそよろしく、えーと雨宮さん」

「慈雨でいいよ」

「じゃ、じゃあ慈雨、絵が出来たら必ず連絡するから」

そんなやりとりをした後、慈雨が部活に遅刻しそうだったので別れの挨拶をし、サイトは彼女の姿を見送った。

三度マットの上に腰をおろすとなんだか知らない疲れがどっと押し寄せてきた。部活以外で女の子とアドレス交換するのは中学以来だ。

それにしても繰り返し系の名前ってどういうことだろ？まあとりあえずこの絵を完成させなくちゃな。

サイトは火照った体を冷やすように薄青色の絵の具を家の上の背景に塗り重ねていった。

再び雨宮家へ（後書き）

なんか作者も学生時代を思い出して少し恥ずかしくなりました（笑）

合宿終わる（前書き）

今回で合宿が終わります。

合宿終わる

夕方五時過ぎ、部員達が「ひまわり」の代表に「ありがとうございますでした!」と頭を下げると大島先生がレンタルし直したハイエースに乗り込んで函館を出発した。目的地まで大体30分。夏休みのため渋滞が続くだろう。部員達はさすがに疲れた様子を見せ、神崎と条一郎が

眠ってしまおうとする松野にイタズラをしかけていた。サイトの隣に座った大和がサイトの顔を覗き込むと言った。

「サイト、さつきからなんか、ニヤニヤしてるけど・・・なんかあった?」

大和に言われるとサイトはビクつと反応し、「別になんでもねえよ」と言い、荷物の中からPSPを取り出した。女の子とアドレスを交換して浮かれてます、なんてバレたらみんなに馬鹿にされるだろうが。後ろの方で「うおお、やっぱ詠進の絵はうめえーな」と三上先輩の声が

した。振り返ると詠進先輩が昨日、今日描いた「チャーミーグリーンの坂」の絵をみんなに見せていた。サイトがPSPをリュックに戻し

「俺にもみせてください」と言い、スケッチブックを三上先輩からうけとるとそこには鉛筆で描かれた風景画が描かれていた。

坂道を頂上から描き、坂の下には海が広がるその絵は細かな線とたくましい実線が混在した「絵がうまいオーラ」が漂う空気感を醸し出していた。

本当はもつと適切な評価をしたいのだがみんな炎天下での写生会に疲れており、「いやー、ここの街灯のタッチが」とか「雲の描き方が秀逸」

など抽象的な褒め方をしていた。それにも関わらずその絵を描いた詠進先輩は「みんなありがとう」と言って笑みを浮かべた。

あたりが暗くなるころ大島先生が運転するハイエースは出発点と同じ恵港に到着した。なんども睡眠を妨害されご機嫌斜めな松野を始め部員達が車から降りると大島先生が部員達を集め、この合宿を締めくくるように言った。

「みんな合宿で自分の能力を再確認できた？ダメだった人はそれを明日から始まる夏の大会に生かして頑張ってちょうだい。」

それじゃノマちゃん何かある？」

話を振られ、ノマ部長はしばらく考えたが「特にありません」と答えた。なにもないのかよ。

その後、部員達は解散し、みんな各々に帰宅の路に着いた。サイトは家のベッドの上で携帯電話を眺めていた。家の絵は完成したけどどうやってそれを慈雨に見せればいいのか。しばらく考えた後、サ

イトは画用紙を鏡の前に立て、携帯のカメラ機能でその絵を撮影した。

それをメールに添付し、「斉藤才斗です」というメールタイトルをつけ

「今日描いた絵です。これからよろしくお願いします」という本文を書き「雨宮慈雨」にメールを送信した。ちょっと力強い文章だったかな？

まあいい。今日は疲れたから寝よう。サイトはベッドのなかに入り明日から始まる夏の大会に向け英気を養う事にした。

合宿終わる（後書き）

突然ですが、作者の都合でしばらく休載します。できるだけ早く戻ってきます。期待して待っていてください。

反省会？（前書き）

おひさしぶりです。気が向いたので少し更新してみます。完走できるよう頑張ります^^

反省会？

次の日、サイトが美術部の部室のドアを開けると冷やかな風がサイトの首筋を撫でていった。そうか、俺達が合宿に行っている間に大路地先生がクーラーをつけてくれたんだっけ。サイトはドアの正面に設置されたクーラーを見つめるとありがとう、という意味でぺこり

と頭を下げた。その様子を見て、先に部室に来ていた松野が声を掛けた。

「おはようサイト。昨日描いた絵、持ってきた？」

松野に言われサイトは挨拶を返すと「ごめん、持ってくるの忘れた」と頭をかきながら答えた。松野のとなりにいた神崎が

椅子からずり落ちるようにして笑う。

「せっかく合宿で絵を描いたんだからみんなで見せ合おうと思ってたんだよ。昨日はみんな疲れてたし、時間も無かったからさ。まっつんは何の絵を描いたんだっけ？」

神崎に聞かれ松野は待つてました、と言わんばかりにご自慢のスケッチブックを取り出した。意気揚々とページをめくろうとすると

「みんな、おはよー」という明るい声と共にノマ部長が教室に入ってきた。「おおー！すずしいー」部長が夏服のすそをぱたぱたとさせる

松野は咳払いをし、「おはようございます。部長。」と顔を赤くして挨拶をした。サイトと神崎も部長に挨拶をすると後ろから大和と条一郎も

教室に入ってきた。「あれ？部長と一緒に来たの？」神崎が聞くと二人は笑みを浮かべながらうつむいた。

「もう！ずっと私の後ろつけて歩いてきたの？声掛けたらいいじゃない！」ノマ部長がわめくと「しょーがないじゃない。ウブなんだから」

と言いながら舞先輩が教室に入ってきたのでサイトはすこし可笑しくなった。カバンを机の上に置くとノマ部長が話を切り出した。

「みんな、夏の大会なにで絵を描くか決めた？」

サイトが聞き直すと「油絵と水彩画、どっちで描くか、ってこと。キャンバスの木枠を用意するから油絵を描く人は先に教えてよね。」

ノマ部長が言い終わると松野が「はい！僕は油絵で描こうと思います！」と拳手をして答えた。やる気満々の松野を見て舞先輩がふっと笑うと「私も油絵で描く」と手をぶらぶらさせて答えた。条一郎が少し考え込んだ様子を見せると「おれは・・・水彩画で・・・お願いします」

と大和がちいさな声で言った。神崎も「おれも今回は水彩画にしようかな」とつぶやいた。サイトは持ってきた油絵セットをどん、と

机に投げ出すと「斉藤サイト、油絵でお願いします！」と明るくはつきりとした声で部長に答えた。それを聞いて糸一郎も「俺も油絵で」

と消え入りそうな声をあげると部長は「わかった。明日までに用意しておくね。」とメモを取りながら言った。夏の大会の油絵のサイズの

最大の大きさは20号と決められており、部員達はこの間発表会で松野が描いた絵よりすこし小さいサイズの大きさのキャンバスで絵を描くことになりそうだった。

俺にあの大きさの絵が描けるだろうか。サイトの胸に不安と期待が広がった。部長の話が終わると神崎が思い出したように手を叩いた。

「あ、そうだ。まつつんに絵を見せてもらっただった。やまちゃんと糸一郎、昨日描いた絵、持ってきた？」

そう言われると二人はカバンから昨日までの合宿で描いた絵を取り出した。松野は教壇に上がるとスケッチブックを教卓の上に広げた。

部員達は松野が描いた絵を覗き込んだ。

アナログとデジタル（前書き）

びゅうです。美術部でした。

アナログとデジタル

松野の絵は山の中腹から函館の市内を見下ろした風景を描いていた。濃い鉛筆で下書きされた線の上に独特の重い色が乗っている。

水彩画だというのに軽やかな描写は見られず、おそらくこういった風景画には使われないであろう緑や赤茶系の大気に覆われた風が函館の

街を落ち着いた配色に納めていた。サイトがおおう、と感嘆の声をあげると神崎が「なんか、昼間に描いたのに夜の絵みたい」と冷やかした。

松野が不機嫌そうにぷい、と顔を背けると「今回も松野ワールド全開の絵だね！」と舞先輩が笑みを浮かべて言った。気を良くした松野は

「この調子で大会も頑張りますよ！」と鼻息を荒くして左手を握り締めた。次に神崎と大和が同じ場所で描いた教会の絵をみんなに発表した。

2人とも絵に色がついていないデッサンだったが教会の形を捉えたバランスのいい絵に仕上がっていた。二つの絵を見比べていた松野が呟いた。

「うーん、やっぱり大和と比べると神崎の絵は荒さが目立つんだよなあ。」

それを聞いて神崎が頭を抱える。「うるせえ！悪かったな。そりゃ

大和は中学の時から美術部だったんだから俺なんかより上手いに決まってるよ！

次！条一郎！早く見せて。」

神崎がスネるように条一郎を促すと条一郎はおそろおそろ画用紙を体の前に出した。画用紙には赤い建物が描かれている。

「赤レンガ倉庫を描いたんだけど、観光客に見られたり声を掛けられたりしてあんまり集中して描けなかったんだ。それにレンガの特徴を

掴むのが難しくてなんか、こんな感じの絵になっちまった。」

部員達が覗き込むと赤いレンガの倉庫は赤と茶色が妙なバランスで混じった見る人に不安を抱かせるような仕上がりになっていた。ノマ部長が口を開く。

「絵を描く時は集中力が大事、って大路地先生も言ってたよね？やっぱりある程度自分の世界にこもって真剣に描かなきゃダメだよ」

先輩の少しキツめのアドバイスを受けて条一郎は申し訳なさげにうつむいた。条一郎は高校生になってこの美術部に入るまでは真剣に絵を

描いたことがない。同じ境遇のサイトが重くなった空気を変えるように声をあげた。

「あ、そうだ俺、昨日描いた絵、携帯で撮影してたんだ。ちょっとサイズちいさいけど見せるよ。」

そついいながらサイトがポケットから携帯電話を取り出すとバイブ

機能が作動し、メールが届いた。メールの送り主は雨宮慈雨だ。

サイトは何の意識もなくメールを開いた。

「サイトへ メールありがとう。 構図の取り方がすごく良くて素敵な絵だと思う。 私も自分の絵、送るね」

添付されたファイルを開くとアニメのような等身の女の子がサイケデリックな風景の中で片目を閉じて微笑む絵が描かれていた。

ん？サイトが状況を飲み込めないでいると「これ．．パソコンを使って描いた絵じゃない．．？」と後ろから携帯を覗き込んだ大和が呟いた。

「ほんとだ。サイサイ、こんなシュミあるなんて少し意外」ノマ部長の声を聞いてサイトが我に戻ると一気に焦りが噴出してきた。

「ち、ちがうんです！この絵は俺の絵じゃなくて！ええっと！なんて言えはいいんだろ．．．」

サイトが大きく頭を掻きながら弁解しようとすると思先輩が女の匂いを嗅ぎ取ったのか目配せをしながら色っぽい声を使う。

「サイト君。 どういうことかちゃんと説明しなさいよね」誤魔化したりしたらお・し・お・きしちゃうわよ。」

ああ、こうなった以上、仕方が無い。サイトは合宿で雨宮慈雨という函館の美術部員と出会ったこと、その子の家を描かせて貰った事、その子と連絡先を交換したことを先輩に伝えた。 サイトの話を聞く

と「サイト、お前、やる時はやる男なんだな．．．」と条一郎が目を輝かせた。

大和と神崎が驚いたように顔を見合わせている。写真の絵を覗き込んだ松野が納得できないような口調で言い放った。

「確かに上手い絵だけど、パソコンで絵を描くなんて少し軽蔑しちゃうな」。パソコンで自動で色を塗ったり拡大したりできるんだろ？

それは楽しんで絵を描いてるって事だろうし、純粹に美術とは言えないんじゃないかなあ。」

サイトがむっとして言い返した。

「まっつん、WEBデザイナーって仕事知らないのかよ。今はこうやってパソコンで絵を描いてネットで発表するのが流行りなんだよ。」

サイトの様子を見て舞先輩が子供を見るような目で笑った。慈雨がこういう絵を描いてるなんて意外だったな。サイトは自分が描いた絵の

事を忘れ、デジタル技術で描いた慈雨の絵を否定する松野と言い争いを繰り広げていた。

驚きの発表

「やっぱりさ、自分の力で描いて初めて自分の絵って言えるわけじゃない。それを機械にやってもらうのは僕は違うと思うんだよな。」

「だから、こういう描き方もある、って言うてるだけじゃん！自分の価値観を人に押し付けんなよ！」

サイトが松野に対して声を荒げた。会話の話題になっているのは雨宮慈雨の絵についてだ。パソコンを使って描かれたその絵は手で描かれた

絵と違い、アニメのようなポップな雰囲気やデジタルの色彩から発していた。2人のやりとりを見ていた神崎が大和に聞く。

「なあ、やまちゃん。パソコンで絵、描いたことある？」

「うーん・・・俺も家のパソコンに画像編集ツール入れてるけど・・・ああいう絵って・・・大会に出せるのかな・・・」

大和が考え込むとノマ部長が下唇に指を付き立てて話す。

「やっぱり深夜アニメとかの影響で大会でもあーいうイラストみたいな絵は増えてきてるよね。でもやっぱり票は入らないみたい。投票するベテランの先生達からはなかなか認めてもらうのは難しいと思うよー。」

ノマ部長の話聞いて松野がふふん、と鼻を鳴らしてサイトに言う。

「ほら、部長だつてそういつてるじゃん。僕たちが描いてるのはマンガやイラストじゃなくて『美術』なんだから。いくら見栄えが良くてもパソコンで描いた絵じゃ全国には行けないよ。」

サイトは唇をかみ締めた。慈雨、お前はどという気持ちでこの絵を描いたんだよ。すぐにでもメールして問いただしたかった。

付き合いが浅く、彼女の絵を擁護してあげられなかったのが悔しかった。「お、みんな来てるじゃん」三上先輩がドアから教室に入ってきた。

うつむいているサイトに「なにかあった？」と聞くとサイトは「いえ、別になんでもないです」と答えながら携帯をポケットにしまった。

三上先輩が部員達みんなに聞こえるように言った。

「残念な知らせが2つある。大清水のやつ、部活辞めるってさ。」

えっ、部員達に動揺が走る。顔をしかめるノマ部長を見てサイトは合宿での出来事を思い出した。やっぱり立ち向かえなかったんだな。

舞先輩が呆れながら「この時期に何考えてるんだろっね。」とせせら笑うように言った。あの先輩、ノマ部長の事、どれくらい好きだったんだろっ。

サイトが大清水の感情を読み取ろうとすると信じられない一報が三上先輩の口から発表された。

「それともう1つ、詠進、今回の大会、出場辞退するって。」「え

っ！？どういうことですか！！」

サイトが三上先輩に食って掛かるのを条一郎が止める。他の部員達もびっくりしたように声をあげる。

「詠進のやつ、函館の大学にほとんど内定が決まってるんだけど他の大学受験するんだって。今日聞いたばかりだから俺もよくわかんないよ。」

自分に絵の楽しさを教えてくれた詠進先輩が出場辞退？サイトの頭の周りをたくさん疑問符が回る。どうして？なんで？倒れるように

机に手を掛けると言葉を振り絞った。「俺、そんなの、信じられません。だって詠進先輩は去年も全国大会に出てるんでしょ？その人が絵を描かないなんておかしいじゃないですか！」

部室をしばし沈黙が包み込む。ノマ部長がサイトを諭すように言った。

「たぶん今より偏差値の高い大学へ行こうとしてるんだから勉強しなきゃならないんだよ。仕方ないよ。私達だけで頑張ろう？」

ノマ部長が呼びかけると「そうだよ、サイト、先輩の分まで頑張ろうよ」と松野がサイトの肩を叩く。でもサイトは納得が行かなかった。

晴天の青空に暗い雲が立ち始め始めた。

本心（前書き）

寝る前に更新します。

本心

「ここで、いいんだよな？」

「うん。先輩の言った場所だところだと思っただけど。」

夕方、サイトと松野と大和の三人は詠進先輩に大会出場辞退の詳細を聞くために部長から教えてもらった詠進先輩の家に行くことにした。

目の前には「パスタ屋　びあんこ」の看板が掛かった洋食屋が建っている。「この店かな」大和がサイトの後ろで言う。

詠進先輩の家は地元で有名なパスタ屋であると事前に教えてもらっていた。サイトが重い木製のドアを開くとからんからん、と鈴の音が鳴る。

瞬間、店の奥にいたシェフと目が合う。長い帽子を被ったその人物にサイトは話しかけた。

「すみません。しおさい高校の美術部の者ですが、詠進さん、いますか？」

サイトの問いかけにシェフは仕事の手を休めて言った。

「詠進ならたぶん部屋にいますから。店の裏にインターホンがあるから、それを鳴らして呼んでやってくれ」

それを聞くとサイトはありがとうございます、と頭を下げた。再

びドアを開け外に出ると松野が「あの人、詠進先輩のお父さんなのかな」

と呟く。大和が「店と家は別になってるんだ」と裏路地を歩きながらきよるきよると目を動かす。

しばらくして言われたインターホンが見えてきた。サイトは一呼吸置くとそれを力強く押した。

「はい、今行くからちよつと待っててください。」

急ぎ足で階段から降りるとたたという音が響く。ドアが開くと意外な訪問者達に詠進先輩は驚いた顔を見せた。いつもとは違う短パンとＴシャツ

姿の詠進先輩を見てサイトが言う。「詠進先輩、三上先輩から話を聞きました。」それを聞くと詠進先輩は

「ユージンのやつ、本当におしゃべりなんだから」と頭を掻いた。その様子を見てサイトは続けた。

「詠進先輩、どうして大会に出ないんですか？俺、先輩と出会ってから絵を描くことがすごく好きになつてきたし、先輩を目標にして絵を描いていきたいって思つてたんですよ。今からでも遅くない。大会に出てくださいよ、先輩！」

サイトの畳み込めるような話し方を聞いて詠進先輩は目を背けた。そして後ろを向くと呟くように答えた。

「僕、東京の大学に行くことに決めたんだ。」「えっ」サイトと松

野が聞き返す。正面を向き直すと先輩は続けた。

「サイト君、僕が学校の玄関で君に言ったこと、覚えてるかい？」

「ええ、覚えています。」

サイトは始めて詠進先輩と出会った時のことを思い出した。自分が感銘を受けた絵の作者は自分の絵を愛していない。

絵を描くだけでは食べていけない。そんなことを言われて頭にきたけどそれは先輩なりに美術の実態をリアルに教えてくれたのだった。

「僕、本当は絵が大好きなんだ」

詠進先輩の言葉が3人の胸に響く。

「僕は東京の美術大学に行って本格的に絵を勉強して画家になろうと思ってるんだ。学校に入学するためにいまは一生懸命勉強して、大好きな絵を描くのを我慢して大学に行こうって決めたんだ。そのために今回の大会を辞退するのは……うーん、仕方ないって言葉は使いたくないな。」

先輩は必死に「仕方ない」に代わる言葉を探している様だった。見かねたように松野が言う。

「詠進先輩が本当に絵が好きなんだっていうのは普段の行動を見ても分かりますよ。今回の大会は任せてください！先輩の分まで全国で観光しておいしい物でも食べてきますよ！」

松野の力強い言葉を聞いて詠進先輩は「そうかい。期待してるよ。」と笑みを浮かべた。サイトは決心したように息を吸い込んだ後先輩

に言った。

「先輩の気持ちはよく伝わりました。画家になるために他の事を努力するのは大事なことですもんね。先輩がいないのは残念だけど俺達でなんとかしおさい高校美術部のメンツは建てておきます。」

サイトが言い終わると詠進先輩はサイトの両肩に手を置き、瞳を覗き込んで言った。

「サイト君、君の長所は絵の構図の取り方の上手さとセンスの良さだ。全国区となるとデッサンが上手い人、色彩感覚が飛びぬけてる人がたくさんいる。でもその人達に引け目をとることは無いんだ。君は君の好きなように絵を描けばいい。誰にも遠慮せず誰よりも自由な絵を描いて欲しい。これが先輩として僕が言えることの全てだ。頑張つて。」

先輩のいう事を聞いてサイトの目に涙が浮かんた。自分が尊敬してる先輩がこんなにも自分を期待しているなんて。サイトは目を拭くと

「先輩、こんな遅くにありがとうございます！それじゃ、そろそろ帰りますね。明日から本格的に絵を描き始めるんでよろしくお願いします！」

と先輩に別れのあいさつをした。大和と松野の手前、おいおいと泣く訳にはいかないからだ。サイトの気持ちを汲み取ると詠進は笑みを浮かべた。

「みんな、心配かけてすまなかつたね。僕も自分の気持ちをみんなに言えてスッキリしたよ。僕もセンター試験にむけて勉強するからみんなも頑張つて絵を完成させて見せてよ。それじゃ、今日はおや

すみ。」

先輩と別れのあいさつをすると三人は帰宅の路についた。自転車を押しながら大和が「蚊に刺された・・・家の中に入れてくれても良かったのに・・・」

と呟く。「突然来たんだから仕方ないよ。彼女が来てたのかもしれないし。」「変なこというなよ。勉強、一生懸命頑張るって言ってたじゃねえか。」

そんなことを話しながら3人は夏の大会に向けての絵の構想を膨らませた。絵の作成期間は夏休み明けの始業式の日まで。分かれ道でサイトは気持ちを抑えきれずに夜道を駆け出し始めた。

本心（後書き）

作者は大学を受験しなかったので受験勉強の時期だとかが実際の高校と異なっている部分があるかもしれませんが^^；もう寝ます。

シサクのおんたち

次の日の朝、サイトは美術室へ向かう階段を意気揚々と駆け上がった。昨日決心したように詠進先輩の分まで頑張つて良い絵を描かないとな。

サイトが勢いよく教室のドアを開けると中で条一郎と舞先輩が手をつなぐように抱き合っていた。サイトはぴしゃり、とドアを閉めた。

「ち、ちがう！ちがうんだ！」

条一郎が急いでサイトの元へ駆け寄つた。「キャンバスを張ろうとしてたんだよ！」条一郎に押されてサイトが部室に入ると舞先輩が木杵

を抱えて条一郎を待っている。どういうこと？サイトが聞くと条一郎が答えた。

「俺も初めてだからわかんないんだけどよ。1人がペンチで生地を引つ張つて、もう1人がその上を釘で止めるんだ。そうやって生地を木杵に貼り付けていくんだ。」

条一郎の説明を聞いてサイトはなんだ、抱き合ってたんじゃないんだ。と息を吐き出した。それを聞いて舞先輩が

「バカなこと言わないでよ。言つとくけどあたし、年下はノーマークだから。」と誰も聞いていないことまで答えてくれた。

サイトはイスに座り、二人の作業を眺めていた。条一郎がペンチで

生地を引っ張り、舞先輩がハンマーで釘を叩く。へえ、なんか日曜大工

みたいだ。角を4ヶ所止めると舞先輩が「出来た！1年生は練習も兼ねて、自分達でやりなさいよね！」と生地を止めたキャンバスを抱えて言った。

そうか、この人は自分のキャンバスを後輩に手伝わせて作らせたのか。一仕事と終えて肩を回す条一郎と一緒にキャンバス作るうか、とサイトは

呼びかけた。条一郎はうん、とうなづくと「引っ張る方と釘で打つ方、どっちがいい？」と聞いてきた。舞先輩がキャンバスになにか絵の具

のようなものを塗りつけて言う。

「引っ張る方はパワーがある人がやったほうが弾力のある良いキャンバスに仕上がるわよ。そのためにわざわざ条一郎にやってもらったんだから。」

条一郎が苦笑する。そういう訳で条一郎がペンチで生地を引っ張る係、サイトが釘をハンマーで打つ係に決まった。条一郎が大きな木枠を取り出すと

「これも昨日、先輩と一緒に作ったんだ。作ったって言うっても4スミを止めたただけだな」と説明してくれた。

サイトはありがとう、と言うと釘を3本口に加え、大工のように腕まくりをして条一郎が木枠を抑えてペンチで引っ張るのを待った。

「おはよー。あ！もうキャンバス張ってるんだー」

サイトがドアの方に目をやるとノマ部長が部室に入ってきた。部長に挨拶をするとサイトは釘をハンマーで思い切り打ちつけた。ガン！釘の頭が

横に曲がる。それを見て「へただなー。ちょっと私に貸してみ？」と部長が言うのでサイトは釘とハンマーを彼女に手渡した。するとノマ部長が

繊細な手つきでとんとんと静かに、正確に釘を木枠に打ち付けて行った。おおー、とサイトが歓声をあげると

「男の子なんだからこれぐらい出来なきゃもてないぞ」とぶりっ子のように部長は答えた。角を止め終わると部長はキャンバスを抱えて言った。

「できた！これあたしの分ね！ありがとね、タカジョー。」条一郎がまたもや苦笑する。サイトは条一郎の肩に手を掛けて同情すると今度は、と言わんばかりに自分達のキャンバスを作り始めた。

シサクのおんたち（後書き）

今回は書きかたを変えてみました。サイトのセリフがありません。もう寝ます。

大会ミーティング（前書き）

連載再開してから少しづつですけど面白くなってきました。よろしくです^^

大会ミーティング

サイトと条一郎が自分達のキャンバスを作り終わると山田蛭子先輩を除く夏の全道大会出場予定の部員達が部室に集まっていた。

サイトはキャンバスを自分の机の横のイーゼルに乗せると額の汗を拭った。20号という大きさのキャンバスは近くで見ると壁のように大きい。

夏休みの間、部室に来るたび、こいつと顔を合わせる事になるのか。サイトは生地凹凸を爪先でなぞりながらそう思った。後ろから松野が話しかけてきた。

「そうだ。サイト、キャンバスにジェッソはもう塗った？」

ジェッソ？ サイトが聞き直すと松野は説明した。

「ジェッソを塗ると油絵のノリが良くなるんだよ。キャンバスと絵の具をつなぐ接着剤、ってところかな。先輩達が残っていたのがあるからそれ、使いなよ」

それだけ言うと松野は自分の席に戻った。なるほど。サイトはいつか大路地先生が教えてくれた棚からOBが残してくれたジェッソと描かれた

容器を取り出した。松野に使い方を聞くとサイトはジェッソを水で薄め、イエローオーカーという名前の油絵の具で色をつけて筆でキャンバスに

塗りつけ始めた。ジェッソと油絵の具を混ぜる必要は無いが、これから描く絵のイメージを膨らませるために有効だそうだ。大きめの筆で

2回、3回キャンバス全体を黄土色で覆うように筆で塗り終わるとこれからこの上に描かれるであろう大作の下地が出来上がった。

サイトが筆を置くと隣の席で大和と神崎が木のボードに画用紙を貼り付けている。「水彩画を描くにも準備が必要なんだよ」

そういうと神崎は画用紙の隅全体をマスキングテープで止め始めた。大和が水を用意するために水のみ場に向かった。そうか、水彩画も画用紙に水を馴染ませるために一度画用紙全体を水で塗らす必要があるんだっただけ。サイトはこの間の発表会で自分の絵に施した技法を思い出した。

大和が水彩画用紙に水でハケを塗り終わると12時を告げるチャイムが鳴った。「そろそろ休憩にしようよ」ノマ部長の掛け声で美術部員達は

学校の近所にあるバーガーショップへやって来た。注文を受け取り部員達がテーブルを囲むとサイトが話を切り出した。

「やっと絵を描く下準備が出来たわけだけど、問題は何を描くかだよな。ともちゃんは何を描くか決めた？」

サイトの向かいの席に座った神崎が言う。

「おれは今回も魚の絵を描こうと思う。やっぱり描きなれたモノで勝負するのが一番だからね。」

「へえ。でも今回は魚一匹だけ描いて終わり、ってわけにはいかないでしょ？」

「うるせえな！まつつんは何を描くんだよ？」

話に茶々を入れるように絡んできた松野に神崎が言い返す。松野はテーブルの上で手を組んで話し始めた。

「僕、来月で16歳になるんだ。」

「へえ、おめでと。」

神崎が興味なさそうに口にポテトを運ぶ。

「ありがとう。いや、そうじゃなくて！僕は今回の大会で自画像を描こうと思ってるんだ。15歳の自分を作品として残せるのは今回の大会が最後だからね。そういう意味ではこのタイミングで夏の大会があつて本当に良かったと思うよ。うん。」

自分に世界に入り込もうとする松野を挟んでサイトはバニラシェイクを吸っている大和に話を振った。

「大和、お前は何描こうと思ってるんだよ」

サイトの問いかけに大和は「まだ・・・秘密」といつものようにフツと笑いながら答えた。あのなあ、と言わんばかりにサイトは忠告した。

「おまえさあ、今回の大会は地底人の虐殺とかエイリアンの宇宙戦争とか、そういうグロい絵を描くのは止めてくれよな。おんなじ学校の俺達にまで採点が影響するかもしれないじゃん。」

サイトの話を聞いて大和は「宇宙戦争．．いいね、それ．．．」
と言いながらシェイクをかき混ぜながら大和は微笑んだ。ダメだ、こいつ。

テーブルのスミで所在なさそうにジュースをすすっている条一郎の背中を舞先輩が叩いた。

「大丈夫だつて、条一郎。大会を通して絵を描いてるうちに絶対上手くなるつて。ノマちゃんだつて入部したときは酷かったんだから。『なんなのこれは！まるで小学生の落書きじゃない！』つて大路地先生も驚いてたんだから！」

「あー、それは後輩の前で言わない約束だつていったじゃん！」

口を膨らませて怒るノマ部長を見て部員達はケラケラと笑った。へえ、先輩達にもそんな時代があったんだ。感慨深げに部長を見つめる

サイトに三上先輩が「そういうサイト君は何描くか、決めたの？」と聞いてきた。サイトはうーん、と腕組みをしながら考え込んだ。

サイトは夏休みが始まる当初、ビルや家などの建築物を大会で描こうと思っていた。しかし実際に雨宮家を描いたりしているうちに

予想以上にそれが難しいことだという事を悟った。柱の採寸をひとつ間違えるだけで建物の大きさがずいぶん変わってきてしまうし、

なにより完成から逆算して色を塗り重ねていけないといけないという事が参考書に書かれていたため、最初の油絵に建築物を描くというのは

非常にリスクが高い気がした。サイトはしばしの考案の末、先輩に答えを出した。

「俺、今回の大会は風景画を描こうと思っています。」

「おおー、いいねえ。自画像に風景画。今年の新人部員は見所がある連中ばかりだね。これで心置きなく俺達も卒業できるよ。」

そうなんだ。先輩達はみんな3年生なんだ。その事を思うとサイトの胸にこれからの美術部を背負っていかねばならないという

責任感が芽生えた。昼食をとり終え、学校に戻る道でサイトはどんな風景画を描くか、思考をめぐらせた。

大会ミーティング（後書き）

今回は会話に重点を置いて書いてみました。サイトがどんな絵を描くか作者も楽しみです^^

サイト、色々考える。(前書き)

今回はあのキャラが登場します。

サイト、色々考える。

キャンバスを作った次の日、サイトは絵の題材を探しに函館に行くことにした。

駅のホームで電車を待っていると「あれ？サイト、サイトじゃね？」と声が聞こえたので振り返ると見覚えのある姿があった。

「おれ、おな中の武田剛士。^{たけだたけし}覚えてる？いやーなつかしいなあ。」

サイトに指をさす武田くんを見てサイトもあー、と指さしながら立ち上がった。中学の同級生の武田くんは地元の高校に進学したとメール

で聞いた。中学時代とは違って少し垢抜けた顔をし、矯正器具の付いた歯を見せて笑った。

「俺達ライブハウスの帰りなんだ。サイトはこれからどこに行くの？」

武田くんは後ろにいた2人に振り返りながら言った。ああ。武田くんは高校に入ってロックに目覚めて軽音楽部に入部したんだっけ。

4月に受け取ったメールの内容を思い出し、函館に行くよとサイトが答えると「サイトはなんか部活やってんの？」と体臭を消すためにふった香水の匂いを撒き散らしながら武田くんが聞いた。

「俺、学校で美術部に入ってるんだよ。今日はこれから絵の題材を

探しに函館に行くんだ。」

武田くんが友達と顔を見合わせる。「おれ、なんか悪いこときいちゃったかな？」ガラが悪そうな武田くんの友達が含み笑いをする。

「美術部といやあ、クラスではぶられた奴らのすくつじゃね？」

「ばか。すくつじゃなくてそうくつ、っていうんだよ。気にしないで。こいつちよつとばかなんだ。またなんかあったらメールしてよ。じゃあな。」

そういうと武田くんは仲間のふたりと一緒に去って行った。武田くん、すっかり変わったなあ。俺も高校に入って少しは変わったかな。サイトは電車の席に座り、景色を眺めると考えにふけた。世間一般から見て美術部の印象ってどうなんだろ。やっぱり結果を出せなくても

運動部やってたほうが就職に有利だろうし、絵を描くよりも音楽やってたほうがもてるに決まってる。「コミュニケーション能力が無い人間

は社会でやっていけない」ということを就職相談の職員が言っていたのを思い出した。確かに毎年一回戦負けのサッカー部員でも体を鍛えて

いれば体力があるし、先輩、後輩に囲まれていればコミュニケーション能力とやらも自然につくだろう。一方、美術部員はどうだろう。良い絵を作り上げるには自然と自分の世界にこもらなければならな

いし、ほとんど1日を部屋の中で過ごすため不健康極まりない。

そう考えると笑みがこぼれた。まったく正反对じゃないか。会社に入ったら自分の世界観を振り回す新入社員なんて上司からみたら使いつらい

ことこの上ないし、大和のような受け答えをするヤツなんて面倒臭くて相手にされないだろう。本当、俺達のやってる事って時代と逆走してるな。

サイトは自虐的に窓に額をこすった。でもこれって、すごいロツクなことじゃないか。なかなか他の高校生にはできないことだろ？

当事者であるサイトは思う。問題なのはこれが一般社会では良く理解されてないことだ。「絵を描くだけじゃ食べていけない」詠進先輩が

言っていた本当の意味がわかった気がした。そんなことを考えていると電車は函館に到着した。改築された真新しいホームから出るとスカッとした暑さが出迎えた。サイトは合宿の時に訪れた函館山を目指して歩き始めた。

サイト、色々考える。（後書き）

武田くんに関しては第1部にメールの文章だけが少し登場しています。今回の話は作者が仕事場で口すっぱく「周りとコミュニケーションを取れ」と上司に言われているのでムシヤクシヤして書きました。後悔はしていません（笑）。真冬になりかけてますが、作中は真夏の日の出来事です・・・今年の夏を思い出して読んでください。なんたってね・・・

climb a mountain (前書き)

昨日、更新をサボったので2話連続で更新します。

climb a mountain

サイトは海沿いの道を歩くと、条一郎が描いた赤レンガ倉庫を横切り、大清水先輩がノマ部長に告白した波止場を越え、傾斜のきつい坂を

登り、合宿で訪れた宿泊施設「ひまわり」の前まで辿り着いた。3日前に訪れたばかりなのになぜか感慨深い気持ちになった。そういえば

慈雨は元気かな。いけね、今日は雨宮家に行くんじゃないで絵のテーマを探しに来たんだ。雑念を飛ばすように頭を振ると函館山の頂上に

ある展望台をサイトは覗んだ。今日は函館山に登りに来たのだ。とつぴな考えに思えるかもしれないがサイトは今度の大会で風景画を描くことを

決めた。しかし、写真を見て絵を描くだけでは木々の美しさや風の感度、光の暖かさなど細かなニュアンスを伝えることが出来ない。

小説家の仕事の半分は取材、といったように絵を描くにも作者の実話に基づいた体験が必要だ。自然を感じるためには山登りが最適だ。昨日寝る前

にそんなことをサイトは考えていた。函館山の登山口の前に立つとサイトは意を決したように息を吸い込んだ。この暑さのなか登りきる

だろうか。一抹の不安とともにサイトの登山はスタートした。舗装された道の上を歩きながら頂上を目指して歩みを進めるとセミの合唱が

サイトを出迎えた。彼らにとって地上での1週間は土の中で過ごした6年間と比べ、人生の絶頂というべき大切な時間だろう。海老のように

大きい瞳を見慣れないサイトに向けると、羽をこすりあげ、他のオスよりもっと大きい音を出そうと一匹のセミは腹部を膨らませた。

山の中にはたくさんの木が立っている。春に咲く花をつける桜の木、夏に生い茂るアカマツ、冬にちいさな花を咲かすライラックの木など

一見同じに思える木にも色々な種類がある。木々の間に流れる木漏れ日を見てサイトは暖かい笑みを浮かべた。

しばらく歩くとサイトの周りを薄い大気が包み込んだ。呼吸が少しだけ苦しくなる。もしかして雲に入ったのかな。いやいや、そんなわけではないか。

歩を進めると次第に道は狭くなり、強い風が侵入者であるサイトを拒むように体を揺らした。崖の下に目を落すと函館の町並みがジオラマの

ようにちいさく見える。死の誘惑に負けないで。一匹の黒アゲハチヨウがサイトの鼻先をすり抜けて飛ぶ。あなたが行くところはそっちじゃないわ。

こっち、こっちと言うように黒アゲハは道の先の大気の中へ消えて

いった。そうだ、こんなところで立ち止まっていられない。崖辺の花が

美しいと人が思うのはそこで歩みを止めてしまうから、というような文を読んだことがある。もっと上にはもっと美しい風景があると信じたい。

その思いでサイトは頂上に向け足を進めた。

スタートして2時間弱、サイトは函館山の頂上の展望台へ辿り着いた。「あんれま！？あんた、ここまで登ってやってきたのかい！？」

地元の警備員が目を白黒させる。若い登山者を見るのは珍しいそうだ。「自然を体感するため」に山登りをしたなんて説明したらこの人は

どんな顔をするだろう。展望台は観光客用の施設になっており自販機で買ったジュースを飲みながらベンチに腰掛けると一気に疲労感が押し寄せてきた。さすがに歩いて下山は無理だ。ロープウェイを使おう。地上についたら慈雨に「函館に来ました」ってメールしようかな。

山を登り終えたことでサイトには自信が芽生えた。「うわー、すごいー！」観光客のカップルの声につられ、サイトは窓から函館の町を見下ろした。まさに100万ドルの景色。晴天の太陽が振り返った湾岸の海をキラキラと照らし、乾燥した夏の空気が函館の町並みを二スで

塗ったように明るくはつきりと瞳のレンズに映し出していた。この景色を毎日見れるのは天使と神様くらいだろう。サイトは持ってきたデジカメでそこから見える景色を撮影した。そして登山の途中で景色を撮影しなかったことを少し後悔した。でも大丈夫。見てきた景色は

すべて頭のHDDに保存してある。案ずるより産むが易し、いや、論ずるより行うが易し、といったところか。サイトはこの登山により写真の中の自然ではなく実際のリアルな自然を体験できた。これを今回の大会で生かそう。興奮気味にロープウェイに乗り込むとゴンドラは

ものの15分でサイトの身を地上へ送り返した。はは。苦笑いを浮かべると絵のモデルを探すため再び函館の街を探索しようと思ったがさすがに疲れていたためこの日は大人しく家に帰り、次の日の昼間まで爆睡し、襲い掛かる激しい筋肉痛にサイトは身をゆがめた。

climb a mountain (後書き)

今回の話は作者が夏に函館に「取材」に行つて感じたことを書いてみました（詳しくはブログで！なんつつてね）。文章を書くにあたっていい勉強になりました。これを機に才斗の才能が覚醒するのサイトか？作者も楽しみです^^

透明なセカイ（前書き）

作者です。調子が出てきました^^

透明なセカイ

2日後、サイトが美術室に顔を出すとすでに松野はキャンバスに木炭で自画像の下書きを入れ始めていた。あいかわらずの手際の良さに感服すると

サイトは油絵セットをロッカーから取り出すために準備室のドアに手をかけた。その瞬間、条一郎が「ちよつとまったー！」と大声でサイトを制止した。なんだよ、と振り返ると間に合って良かった、という風に息を切らせて条一郎は言った。

「中にいるんだよ。舞先輩が。」

「はあ!?!」

サイトは顔を歪めた。あの先輩、また準備室に男連れ込んでイチャコラしてるのか。サイトの心を読み取ったように条一郎は続けた。

「それだけだったらまだいい。脱いでるんだよ。あの先輩。」

「はあ?!」

サイトが再び声をあげる。後ろにいた松野が説明した。

「舞先輩、今度の絵で自分のヌード画を描くんだって。だから準備室は男子立ち入り禁止、ってわけ。カンベンしてほしいよ。ほんとに。」

やれやれ、という風に松野が手を広げる。なんてこった。それじゃあ舞先輩が部屋から出てくるか、女の部員が来るまで油絵セットを取り出せないじゃないか。サイトがため息をつくときと条一郎の机の上にガラスの置物が置いてある。それを指差すと条一郎が教えてくれた。

「俺、今回の大会でこいつを描こうと思ってるんだ。ガラス製のガラス。だじゃれじゃないぞ。おやじの物置にあつたから持ってきたんだ。」

へえ。サイトがそのガラスを眺めていると松野が「面白い発想だけど透明のガラスを被写体として描くのは難しいと思うよ」。条一郎にそれが出来るのかな。

といたずらっぽく笑った。それを聞いて「馬鹿にするな」と条一郎が答える。今回の大会は彼にとって結果の求められる大会になりそうだ。

しばらくすると「みなさん、こにやにやちわー！げんきい〜？」とノマ部長が部室に入ってきた。サイトは部長に事情を説明した。

「にやるほど。そーいうわけだから私に準備室から油絵セットを取って来て欲しいってわけ？」

「そうなんです。お願いします。」

「だが、断る。」

シュツとした顔でポーズをとる部長に「お願いします！部長だけが

頼りなんです！」とサイトは泣きついた。「仕方ないな」という部長に

ロッカーの鍵を手渡すとノマ部長は準備室のドアをノックし、「舞ちゃん、いる？」と扉の向こうに声を掛けた。「いるわよ」

舞先輩の声が返ってくるとノマ部長は静かにドアを開き「覗いたりしたら殺されるよ。タカジョー。」と釘を刺してドアを閉めた。

残された3人は小声で話し始めた。

「舞先輩、中でどういう風にして絵を描いてるのかな？」

「たぶん鏡を並べてそれに自分の体を写して描いてるんじゃないのか？」

「そんな面倒なことしないで自分の裸、写真で撮ればいいのに。」

「いや、この間性器が写ってる写真は店で現像できないとか何とか言ってたよ。」

「じゃあデジカメで撮って自分でプリントすればいいじゃない。」

「でも、そんなのが出てきたら条一郎、家に持って帰って変なことに使うだろ？」

「うん。申し訳ないと思いながら使ってしまうと思う。」

二やける条一郎を見てサイトと松野はやれやれ、と頭に手を置き、ふうーと息を吐き出した。すると準備室が開き「みんな、なに話し

てたの？」

と油絵セットを片手にノマ部長が飛び出してきた。条一郎が「世界の平和について、ですよ。」と意味の分からないことを口走ると自分の

席に座り、ガラスのカラスを見つめ始めた。

透明なセカイ（後書き）

条一郎のガラス製のカラスですが、ただ韻を踏みたかっただけです
（笑）色々ツツコミどころのある話ですが良いモノが書けるよう、
頑張ります^^

裸形のセカイ

サイトに油絵セットとロッカーの鍵を手渡し、ジューディ&マリーの曲を鼻歌で歌うノマ部長に松野が眉を歪めながら話出した。

「部長の方からいってくださいよ。舞先輩のせいで僕達が迷惑してるって。部屋の1つを私物化されたんじゃない。たまったもんじゃない。」

ノマ部長は鼻歌を止めるとうんと首を傾げて考え始めた。

「私が部長でエライのは確かだけど、舞ちゃんは全道大会に出たりして結果を出してるからな。力関係では舞ちゃんのほうが私より上ってわけ。それに舞ちゃんがここでみんなの前でハダカで絵を描き始めたらどうする？」

ノマ部長が口をすばめると松野は顔を赤くして「それじゃ、仕方ないですね」と言っただけ視線を落とした。すると、「はいはい、迷惑かけて」

「ごめんなさいね」といいながら準備室から舞先輩が現れた。バツの悪い松野が「先輩、今日はもう描かないんですか？」と聞くと

「今日は肌のハリが悪いからやめておくわ。それよりサイトくん、もう色塗り始めるの？」

先輩に聞かれサイトは事情を話した。

「いえ、俺油絵描くの初めてだから一度家で画用紙に描いてみてからキャンバスに描こうと思ってるんです。だから油絵セット、家に

持って帰ろうかと思ひまして。」

サイトの話を聞くと松野が「へえ。描くの決まったんだ。」と聞いてきた。

「そうなの。3日も休んだから私はてっきり函館の女の子とデートでもしてきたのかと思ったわよ。」

舞先輩が茶化すと「そんな訳ないですよ！函館に言ったのは事実ですけど、絵の題材を探しに函館山に登ってたんですよ！」

サイトが叫ぶと「一枚絵を描くためにそこまでののかよ。すごいなおまえ。」と条一郎が驚いて言った。

「サイト、とうとう僕がいるフィールドに足を踏み入れたようだね。」松野が不敵に笑みを浮かべて訳のわからないことを言う。

サイトがカバンから写真を取り出すと「函館の写真？」と松野が聞くので「いや、近所で撮った写真」とサイトは答えてその写真を

松野に手渡した。そこには木が6本生えている雑木林の風景が写っていた。

「いい構図の絵だと思っけど・・・ちょっと周りが寂しすぎない？」

松野が尋ねるとサイトはふっ、ふっ、ふと笑みをこぼして言った。

「木の間には俺が体験した風や光を擬似的に表現して描き加えようと思ってるんだ。写真には写っていない鮮やかな世界。俺は今回の大会でそれを表現してみようと思う。」

サイトの話を聞いて「おおー、なんだかかつこいいー」とノマ部長が拍手した。いやいや、それほどでも。そんなことを言いたかったが不安もあつた。見えないものを描くことが出来るだろうか。いや、論ずるより行つが易しだ。とりあえず家で一枚絵を描いてみよう。

部員達としばし談笑するとサイトは今日は午前中で学校を後にした。

裸形のセカイ（後書き）

前回と今回のタイトルは逆なような気がします。が「わざと」です。
年内中に完走できる目処が立ちましたので期待していたださいー
^ ^

ダイスケさん（前書き）

月曜日です。サザエさん症候群が継続中です・・・

ダイスケさん

「サイトー、ごはんができたわよー。サイトー」

下の階から母の呼ぶ声がする。サイトはあー、と声をあげながら床に仰向けに倒れた。

昨日の昼から油絵を描き始めたのだが、水彩画と違う油絵の特性にサイトは振り回されっぱなしだった。

写真を見ながら雑木林に色を付けていくのだが濃い発色の油絵の具は隣合った色と衝突するように自分の色を主張し始めた。本来地味な色

であるはずの茶色や紫が木の表面に塗られた赤を覆い隠すように絵の前に立つ。まるで画用紙の中で色同士がケンカをしているみたいだ。サイトが

仲裁するように油を溶いて色を重ねると薄すぎたのかたらたらと画用紙の上を黄土色が流れ出した。もうダメだ。油絵がこんなに難しいもの

だなんて知らなかった。サイトはぐるぐる回る天井を見て気が遠くなってきた。夏休みが始まってもう1週間。こんなで期間までに間に合うのかよ。

そのまま眠ってしまおうとすると下の方から「おい、サイトくん、一緒に食べようよー」と野太い声が聞こえてきた。アイツ、晩飯まで

食っていくつもりかよ。サイトは声の主の青山大輔の顔を思い浮かべると憂鬱な気持ちになった。

サイトが居間に降りると「おお、サイトくん。今日の晩御飯はそうめんだ。」と夕刊を眺めながら大輔が言った。サイトは舌打ちをして

「父親面してんじゃねえよ。とつとと帰れよ」と母の知り合いの大輔に小声で言う。以前のキャッチボール事件から大輔が家に来る回数は一

減っていたがそれでもたまに来るこの大輔おじさんがサイトは気に入らなかった。

「そうめんと言えば、ちよつと待った、いい物があるんだ。」という大輔は足元のビニール袋からおもちゃの箱のようなモノを取り出した。

そして中からプラスチックのおもちゃを取り出すところだった。

「じゃーん！全自動流しそうめん機」。これで流しそうめんの気分が味わえるぞ。サイトくん、水を持ってきてくれないか。」

サイトは大輔の様子を見て「はあ！？あんたバカじゃねえの！？」と声をあげた。台所から母の恵美が

「サイト、お客さんをバカよばわりはないでしょ？」と水の入ったボウルを持ってやって来た。大輔は恵美からボウルを受け取ると水を

機械に流し込み、スイッチを入れた。ブーーン、という大きめの起

動音がテーブルを振るわせる。「待つてろよ、いまそうめんを流すから」

そう言うのとボウルに入ったそうめんをその機械に入れ「ほら、見る！そうめんが泳いでる！」と流れるそうめんを指さして笑った。

サイトは大きいため息をついた。この人、いい年してなにやってるんだろう。テレビでやっている「サザエさん」の登場人物のノリスケが

このオヤジとダブって見えた。サイトが廊下に向かって歩き出すと「あら、ごはん食べないの？」と母が聞いたので「あとでカップ麺食う」

とだけ言い残しサイトはその場を後にした。あんなおもちゃに入ったそうめんが食えるかよ。俺はおっさんの遊びに付き合ってるヒマはねえんだよ。

サイトは部屋に戻ると自分が描いた絵を見返した。とにかく短時間で描きかたのコツを掴むしかねえ。サイトは新しく油絵用の画用紙を取り出すと油絵の具を油で溶いて再び絵を描き始めた。

ダイスケさん（後書き）

大輔は第一部の「キャッチボール」以来の登場です。一部でサイトが油絵セットを買ったために翻弄する話がありますが、少しかわいそうになったので大輔から油絵セットをもらっ、という形にしました。今週も頑張りましょう^^

木を見て森も見て

水曜日の朝、サイトは油絵で描いた画用紙を他のものに色が付かないよう紙袋に入れ「風たちぬ通学路」を登っていた。

今日で夏休み10日目。北海道の高校の夏休みは25日しかない。制作期間中盤に差し掛かるのにサイトのキャンバスには何も描かれていない。

ペースアップが必要だ。そんなことを考えながら階段を登り美術室のドアを開けた。

「みんな、おはようございます、ってうお!？」

サイトは大和の机の横に置かれた人体模型を見て度肝を抜かれた。

「理科部の人が・・・絵を描くのに必要だからって言ったら・・・貸してくれたんだ・・・」

模型の横からひょいと顔を出して大和が笑う。あのなあ、おまえ。サイトは膝に手を置くと「おまえ、まさかこれを描くつもりなのかよ」と

内臓むき出しのマネキンを見て言った。「全部ではないけど・・・グロにもリアリティが必要だと思ってね・・・」もう勝手にしろ。サイトが教室を

見渡すと松野の絵にはもうキャンバス全てに色が付いている。「おお、まっつん早いねえ」サイトが声をあげると松野は振り返り

「サイトもそろそろ描かなくて大丈夫？油絵は乾くまで時間が掛かるから先倒して計画は進めたほうがいいよ。」と忠告した。それを聞いて

「だいじょぶ、なんとかするから」とサイトは言い、準備室に向かつて歩きだした。あつ、と言つて立ち止まると近くにいた条一郎が

「今日は舞先輩がいないから大丈夫だよ」と教えてくれた。ドアに手を掛けると思い出したように条一郎がサイトの背中に言う。

「部屋の中に布が掛かった絵があるけど、それは見たら死ぬ絵だつて舞先輩から言われてるから。くれぐれも変な気を起こさないようにな。」

条一郎の話を聞いてサイトはうなづいた。その呪いの絵は舞先輩の描きかけのヌード画だろう。見たい気持ちもあったがまだ死にたくは

なかった。サイトでロッカーを開け、横目で布の掛かったその絵を睨みながら木炭と練り消しゴムを取り出した。準備室から出るとサイトは教室の

真ん中で絵を描こうとしている神崎に声をかけた。水彩画のボードに鉛筆で下書きが施されている。うつすらとした線を見てサイトは尋ねた。

「これ、もしかして水族館の絵？」

縦書きで描かれているその絵には小魚の魚群やラッコやイルカの海洋生物、そしてサメやアナゴなどが描かれていた。神崎が含み笑いをして答えた。

「そう、水族館のオールスター勢ぞろい、ってわけ。まあ、ラッコやサメと同じ水槽じゃ飼えないんだけどね。それはファンタジー、ってことにしといてくれ。」

神崎の絵を見下ろしてサイトはほえーと息を漏らした。「まさに夏休みにふさわしい題材だよな」後ろの方で条一郎が言つと、

「そういう条一郎は早く自分の絵に取り掛かれよ」と神崎が茶化した。条一郎の絵は置物の構図がうまく取れていないのか、書き直した木炭の黒い跡がキャンバスを汚していた。上から絵の具を塗るため問題ないがどれが本当の線なのかわからなくなってしまうくらいだ。

サイトはみんなを見渡すと意を決したように発言した。

「ねえ、みんな、ちょっと聞いてくれ。」部員達がサイトに体を向ける。サイトは紙袋から画用紙を出して言った。

「俺、3日間家で油絵を描いてただけどなかなかうまくまとまらなかったんだ。今からみんなに見せるから、どんなことでもいいから

絵の感想を教えて欲しいんだ。」

サイトの話を聞いて条一郎が唾を飲み込む。自分の描いた絵をいわゆる同業者に見てもらって評価してもらうつというのはとても勇気のあること

だと悟っていたからだ。それは発表会や大会などのフォーマルな場とは違い、私情の混じった暴言まがいの言葉が飛び出す可能性がある

る。

しかしサイトはその様なことを言われても真正面から受け入れようと思っていた。そのぐらいサイトの油絵は不安定のよちよち歩きで今後の方向性が見えていなかった。どんなことでもいい。前に進むためのステップが欲しい。大和が描かれた木を指差して言う。

「なんか、全体的に絵のバランスが悪くない？これじゃどの木が前にあるのか分かりづらいんじゃないかな・・・」

うぐ、こいつには指摘されなくなかった。いや、今後のためにもここは真摯に受け止めよう。次に松野が言った。

「うーん、なんかこう、急いで、急いで描こうと思って雑になってる気がするなあ。油絵は色を塗り重ねてく物だから焦らずに全体を見てから色を塗ったほうがいいよ。」

松野の意見を聞いてサイトはその通りです、と答えた。木を見て森を見ず。その言葉が実にこの絵にふさわしい。神崎が俺もいいかな、と手をあげる。

「別に忠告ってわけじゃないんだけどさ、俺が持つてる本に遠近法の出し方が載ってるからそれ見て参考にしたらいいよ。」

そついうと神崎はサイトに薄い本を手渡した。おお、ありがとう。ん？なんだこの本は？神崎が渡した本は熱帯魚の本だ。サイトが意味を

理解できないでいると「ほら、水草のページ読んでみ？」と促され

たのでそのページを見ると水槽に植えられた水草の写真がたくさん載っていた。

それを見て神崎が説明した。

「この写真見てみ？手前に小さい草、奥に背の高い水草を植えて、真ん中に流木を置いて全体のバランスを整えてる。」

サイトがおおー、と感動すると「驚くのはまだ早い」といい、次の写真を指差した。その写真は今の水槽を横から見た絵だ。手前から奥に

向かって土が少しずつ高くなるように斜めに敷かれている。

「こうやって砂を撒くことによってより遠近感が出すことが出来るんだ。てか、聞いてねえか。」

神崎は頭を掻いた。サイトはその本を食い入るように見つめていた。遠近感を出すためにこんなトリックがあるなんて知らなかった。

サイトは目を動かさず「ともちゃん、この本ちよつと貸して」と聞くと「ああ、いいよ。今回のおれの絵、遠近感、あんまり関係ないから」と返事が

返ってきた。雑木林と熱帯魚の水槽、意外なところでこの二つは「（イコール）でつながれた。やっと見つかった遠近法というピッケル。」

サイトの胸の中でこの断崖絶壁に立ち向かう力強い道具が準備できたような気がしていた。

木を見て森も見て（後書き）

第1部で出てきた「遠近法の出し方」について触れなかったので、今回軽く神崎に説明させました。今回は1年生全員の絵の構成を紹介できたのでどんな風に作品を仕上げていくか、作者も楽しみです。

神崎一人旅へ

金曜日の夕暮れ、サイトは持っていた筆をパレットに置くとおおきく背伸びをした。

水曜日からキャンバスに雑木林の絵の下書きをいれ、今日の朝から油絵で色を塗り始めた。ジェッソが下塗りしてあったので

画用紙の上に乗せられる色と違ってキャンバスの上に付けられた色はすっと馴染むように木枠に溶け込んでいった。今日一日でキャンバス

全体に軽く色が付いたのでサイトはしばし充実感に浸っていた。教室を見渡すと腕組をして考え事をしている神崎にサイトは声をかけた。

「ともちゃんどうしたの？絵のことでなんか、悩んでるとか？」

神崎は腕組を解いてサイトに答えた。

「うーん、悩みって程じゃないんだけど．．．なんか魚に勢いがないって言うか、躍動感がない、って言うか．．．おれに技術力がない、ってだけなのかね。」

サイトは立ち上がり、自虐的に笑う神崎の絵を覗き込んだ。背景の水に色は付けられているが、魚やラッコなどの生き物にはまだ色が付けられて

いなかった。なるほど。サイトは神崎の言いたいことが理解できた。

そしてサイトはそれを口に出した。

「つまり魚達がリアルにこの水槽の中を泳いでいるって見る人に実感させられない、ってことでもちゃん悩んでるんじゃないかな？ だったら実際にその魚を見てくるのが一番だよ。オレも自然を描くために山に登ったし。」

サイトの話を聞いて「へえ、山登りしたんだ」と感心すると少し考え込んだ後、こう言った。

「おれも登別にある水族館に行つて見ようかな。あそこならサメもラッコもいるし。前々から一人旅をしたいと思つてたんだ。」

神崎の話を聞いて「え？ ひとりで水族館見に行くの？」と含み笑いをしながらサイトが言つと「じゃあ、他に誰が見に行きたいんだよ」

とすこし恥ずかしそうに神崎は答えた。そして話をまとめるように神崎は続けた。

「よし、とりあえず明日とあさつての二日で登別の水族館に行つて実際に生き物達を見てくるよ。いまから旅館が取れるかわかんないけど。」

神崎の意見を聞いて近くを歩いていた松野が「それはいい考えだね。神崎も僕たちに影響されて美術部員らしくなってきた」と言つと

「少なくともまつつんには影響されてねえよ」と神崎は松野を茶化した。その後サイトに「良いアイデア出してくれてありがとな」と礼を言つと

サイトは「いやいや、遠近法の出し方について教えてもらったお礼ですから」と手を横に振りながら微笑んだ。

「そろそろ夏休みも折り返し地点だからな。こういう下見の事をするんなら早いほうがいいからな。気づけたことをサイトに感謝するんだな。」

なぜか話をまとめるように加わってきた条一郎をサイトがぼつと見つめると神崎は条一郎の絵を指差し、「そんなことより条一郎は自分の絵を

まとめることを考えろよ」と笑いながら言った。条一郎の絵はいまだに色がつけられておらず、何度も、何度もキャンバスに下書きをしている後が黒く残っていたからだ。条一郎はとぼとぼと自分の席に戻ると「俺もベトナムに行ってみようかな」とベトナム生まれの

ガラス製カラスの置物を見てため息をついた。

絵を描く理由（前書き）

2部もついに30話まで続きました。飽き性の私ですが小説だけは完結させるのでこれからもよろしくです^^

絵を描く理由

日曜日の昼、部室で持ってきた弁当をたிரらげたサイトがぼんやりと他の1年生達に言った。

「なあ、ともちゃん本当に登別までいったのかなあ？」

「昨日旅館に泊まって・・・今日水族館に観に行くって、メールがあつたよ・・・」

大和が携帯電話を見つめて微笑む。昨日は大雨が降っていたため心配していたサイトは「じゃあ大丈夫そうだな」と胸をなで下ろした。

「えっ？ザツキー旅行に行ったの？もしかして彼女？」

目を輝かすノマ部長に対し部員達が「ないない」と手を横に振る。松野がお茶を飲みながら話に参加する。

「でも神崎、妹がいるって言ってたよ」

「ほんと？じゃあ今度紹介してもらおうかな？」

「やめとけ。どうせアニキそっくりな顔の妹に決まってる。」

おどけるサイトに条一郎が釘を刺す。条一郎にも妹がいることを知っている松野が「それって体験談？」と茶化すと

「ジョーコの悪口を言うやつはゆるさん」と条一郎は松野にヘッドロックを仕掛け始めた。サイトは2人を無視してノマ部長の絵を見

て本人に聞いた。

「先輩の絵に描かれている人って誰なんですか？」

ノマ部長の油絵には老婆がにっこりと微笑む姿が描かれていた。「もしかして先輩のお婆ちゃんですか？」サイトが聞くと

「んーん、親戚のおばさん。笑顔がとってもキュートでしょ？前々から絵のモデルにしてみたかったんだー。」

先輩が答えると再びその絵を眺めた。おばあさんのほかに白髪頭のおじさんや眼鏡を掛けた老人が後ろに描かれており、一家の団らん、と

いった感じた。そういえばノマ部長の絵を観るのは初めてだった。部長ってこういう温かみのある絵を描く人だったんだ。サイトの心が

ほっこりすると「山田先輩．．．あんまり部室に顔ださないね．．．」と大和が呟いた。ノマ部長がそれに答える。

「蛍子ちゃんはキャンバスを持って帰って家で描いてるみたい。去年もそうだったんだけど．．．わたしはみんなと一緒に絵を描けたほうが楽しいな！」

先輩の言葉を聞いて「そうですよね。その方がみんなの意見も聞けるし、それに、」サイトが一呼吸おいて言う。

「なんか、青春ってカンジがするじゃないですか。」

大和がフフッと笑みを浮かべながらコクコクと頷く。照れ隠しに景

色を眺めると「おまえのその気持ち悪い絵、なんとかならないのかよ」

とサイトは大和の絵を指差して言った。大和の絵は人体模型のマネキンを参考に人間の臓器がバツクに描かれた絵になっていた。

色が付けられていない臓器は心臓だろう。下書きされた心臓の真ん中に目玉のようなものが付いていたので「これはなんなんだよ？」とサイトは尋ねた。

「これは見ての通り、目の付いた心臓．．．その名も『心眼』。この絵の主人公．．．」それを聞いてノマ部長が

「ヒロなんとかボスの絵に少し似てるね」と苦笑いをしながら答えた。サイトは大路地先生の美術の授業で学んだボスの絵を思い出し

「ああ、そうかもな。でも大和の絵はただ気持ち悪いだけな気がするけどな。」と美術の教科書を取り出して言った。それに対し大和は

「ありがとう．．．最高の褒め言葉だ．．．」と満面の笑みを浮かべた。呆れるサイトを横目に松野が大和に聞いた。

「大和は、なんで普通の絵を大会で描かないの？みんなと同じように風景画を描いたりすれば確実に全道には出れるだろうに」

松野の言葉を聞いて大和は「みんなと同じじゃ、意味がないから」と珍しくはつきりとした口調で答える。

「おれは、おれのやり方で全国を目指したい。ちゃんとわかってくれる人だけおれの絵に投票すればいいと思う。おれは自分にしか描

けない絵の世界を追求したいと思ってる。」

大和の宣言を聞いてノマ部長がぱちぱちと拍手した。へえ、こいつそんなことを考えて絵を描いてたのか。絵を描く動機なんて人によって

様々だ。サイトは自分が出会った詠進先輩の絵を思い出した。見てください。俺も先輩のように観る人を感動させる絵を描いてみせる。

サイトは意気込みを入れ直すと自分の絵に向かって再び筆を入れなおした。

絵を描く理由（後書き）

「大和がなぜ絵を描いているのか」というテーマで描きました。『六月の祝日』のように大和をメインにした小説も面白そうだな、と思っています。ジョーコは本編には登場しません（たぶん）。

違和感を長所へ（前書き）

仕事前にもう1話掲載しておきます。

違和感を長所へ

「みなさん、おはようございます」月曜日の昼前、神崎が部室に姿を現せた。サイトと条一郎が近づくと「おかえり！どうだった？登別は？」

と口々に一人旅の感想を聞いた。「まあ、落ち着けて」神崎は自分の席に座るとカバンから写真を取り出した。

「ほれ、水族館で撮った写真だ」そういうと神崎はポラロイドカメラで撮影した10数枚の写真をサイトに手渡した。

2人が写真に目を通すとブルーの水の背景にネコザメやナポレオンフィッシュ、オオカミウオなどの珍しい魚が写っている。サイトはぼんやりと

「へえ、けっこうノリノリで撮影してたんだね」と言う。「うるせえな！恥ずかしいこと、思い出させんな」といって神崎はサイトから写真を取り上げた。

条一郎が写真を指差しながら「このエイの表情、いいな」と笑みを浮かべた。神崎が頷いて言う。

「このエイはこれから絵に入れてやることにしたよ。実際に現場の水族館を見て魚の生態や泳ぎ方なんかをよくわかった気がした。これを忘れないうちに絵に生かさないとな。」

そういうと神崎は絵を描くために水を入れる準備にとりかかった。その様子を見てサイトと条一郎も

自分達の絵の前に戻った。サイトはキャンバスに描かれた木の表面を指先でなでた。先週末に塗った油絵はうす塗りだったこともあり、3日後の今日にはすっかり乾いていた。よし、今日は木を塗り重ねよう。サイトは机の上の油絵セットを開けパレットを取り出しビリジアンと

イエローオーカーを混ぜ油で薄めてキャンバスに塗りつけた。発色の良い黄緑が下の色を覆い尽くしていく。早くクリムゾンレッドのような

派手な色を塗りたくりたい。サイトは写真を見ながら実物に近い色を選択し木の幹を描いていった。

途中、昼休憩を挟み3時過ぎにサイトは今日目標としていた6本の木に色を付けることに成功した。20号というキャンバスは絵を塗っている

とても大きく感じる。イエローオーカーの絵の具がもうなくなりかけている。サイトは立ち上がり気分転換に下の階にある自販機までジュースを

買いにでかけた。そして腕組をしながら考えごとを始めた。あの写真どおりに描くのはいいけど、どうやって俺が体感した風や光を絵に書き加えようか。サイトは階段を降り終わると目を閉じて函館山で経験した自然を思い出した。夏という短い季節を謳歌する生命たちの物語がその世界にはあった。

今自分が描こうとしているのは近所の雑木林の絵。あれ？サイトはその違和感に気付いた。あの写真を撮った時は雨が降る前だったの
で雲

が光を遮っていた。そうか、だからあの絵にはあの時感じた力強さ
や勢いがないのか。そう実感すると急に焦りが込み上げてきた。い
や、まて。逆に

「雨が降りそう」という環境を表現するんだ。鮮やかさや聰明感の
ある風じゃなくなっていたいい。雨を待っている涼しげで何かが起こり
そうな、

そんな不穏な風でいいじゃないか。そしてサイトの絵のタイトルは
決まった。ジュースを飲み干すと明日からキャンバスに描かれる世
界観が

はつきりと定まった。俺が次に描くのは「雨待ち風」だ。興奮する
気持ちを抑えながらサイトは部屋へと続く階段を登り始めた。

違和感を長所へ（後書き）

サイトの絵のテーマが決まりました。文章だけでは伝わらない部分がたくさんあると思いますが、ついて来てください（笑）。

新しい何か

今にも雨が降り出しそうな空の下、条一郎が美術室の一角で悲鳴のような声をあげた。

「なあ、『とうめい』って何色で描けばいいんだ？」

部員達が振り返って条一郎の机に置かれている置物を見た。そして神崎が声をあげた。

「知らないよ。何も色が付いてないから『透明』って言うんじゃないの？」

「それじゃあ困る。俺が描いてるのは透明の置物なんだから。」

そついうと条一郎が置物を持ち上げてまじまじと見つめた。

「白、ってわけじゃないし、水色でもないし、灰色でもない・・・
一体どうすればいいんだ！」

頭を悩ませる条一郎を見て神崎が呟く。

「そう考えてみればそうだな。海の水だっすこしの量だと透明に見えるのに、水族館ぐらい水が集まると青く見えるもんな。不思議だよなあ。」

神崎が自分の絵を見つめ直してうなづいた。松野が呆れたように条一郎に言う。

「だから始めに言ったじゃない。条一郎が描こうとしてる被写体は難しいって。油絵は色の鮮やかさが評価につながるのに透明のものを描いてどうするのさ？」

松野の話聞いて部室に笑い起こる。「そんなこと言わないで真剣に考えてくれよ」条一郎が泣きそうになりながら答える。教室の一番後ろで絵を描いていたサイトは条一郎を笑えなかった。自分も同じようなことで悩んでいたからだ。どうやってこの絵に見えない風や

光を書き加えればいいんだ。サイトの筆は止まっていた。大和が名案が閃いたように条一郎に言う。

「そうだ！．．．置物の下に．．．クロスを敷けば良いんじゃない？．．．」そういうと大和は戸棚から水色のチェックのクロスを取り出し、それを

条一郎に手渡した。それを置物の下に敷くと透明だった置物にチェックの模様がついた。「おおお！！！」条一郎が歓声をあげる。

神崎が「なるほど、そういうことか」と感心して声を出す。松野がまとめるように話始めた。

「そうか。透明なものの周りに色の付いたものを置けば置物がそれを映すもんね。大和って頭いいね！」

松野が褒めると大和が「いやあ〜それほども〜」とクレヨンしんちゃんのものまねで応える。「とにかく！ありがとうな！」条一郎が

大和の手を握ってぶんぶん振る。これでサイト、神崎に続き条一郎までが壁をひとつ乗り越えた。しかしサイトはまた次の壁にぶち当たっていた。

「ちょっと俺、トイレ」立ち上がるサイトを見て「大丈夫？今日5回目じゃね？」と神崎が声を掛ける。「うん。大丈夫」と言い残しサイトは

部室を出た。頭の中で思い描いている世界観を相手に伝えるのは難しい。サイトはこの壁は自分自身の力で乗り越えなければならないと思っていた。

そんなことを考えていると玄関先の自販機の前に辿り着いた。いつも飲んでいるコーラは売り切れていたため、ドクターペッパーという炭酸飲料を

購入した。タブを押し上げると独特の匂いが鼻腔を突き抜ける。一口飲むたびにゲップが出るため、もう二度とこのジュースを買わないことを

サイトは決めた。するとサイトは背中から強い引力を感じた。振り返るとそこにはサイトが美術の世界に目覚めるきっかけとなった

詠進先輩の「風たちぬ通学路」が飾られていた。風？・・・なぜ？サイトはジュースを一気に飲み干すと詠進先輩の絵の前に立ち、風の表現を

探した。あった。見えない風は空を突き抜ける雲として描かれてあった。ペーパーナイフで力強く描かれた雲は通学路まで伸び、

街路樹に絡みつくほどのバイタリティをその絵の中から発していた。そうか！雲に動きをつけることで風の強さを表現出来るのか！

サイトは次に絵の手前に飾られた桜の木を見つめた。花びらが左から右へと散っていくさまが描かれている。なるほど。こういう描きかたで

観る人に風の向きを伝えることが出来るんだ。そして最後に光を探した。雲の切れ間から細く、しかし強い印象で黄色の光がキャンバスの

上部から坂道に向かって降り注いでいる。サイトは入部当初と絵を描いている今とでは「絵を観るポイント」が変わっていることに気が付いた。

あの時は「この絵はすごいなあ。どんな気持ちで、どんな描きかたでこの絵を描いているのかなあ。」といった感じだったのが今は、

「どうやったらこの絵のように力強く、繊細な表現が自分の絵に生かせるか」といった観点で詠進先輩の絵を見つめている。

サイトは空き缶を握りつぶすと決意を決めた。「自分にも出来るはず。」そう思わなければならぬ出来ない。サイトは缶をゴミ箱に投げ入れると

階段を登った。先輩、ありがとうございます。あなたのおかげでなんとか壁に立ち向かえそうだ。にんまり笑みを浮かべると窓の外から

太い光が曇り空を突き破るのが見えた。そのスキマから見える青空を見てサイトは希望の光を見つけたような気がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388w/>

Sea side Art clubber

2011年12月3日13時57分発行